（仮）円山動物園ポスト基本構想　第二回検討部会　議事録

平成 29 年 12 月 13 日（水）14：00～17：00

札幌市円山動物園　動物プラザ

○開催の挨拶

○議事内容

吉中委員長が出席委員委に議事の確認。

－全員了承－

〇世界の動物園について（職員報告）

吉中氏　第 2 回の円山動物園ポスト基本構想検討部会を開催します。前回 11 月 6 日の会議で、このポスト基本構想策定に至る背景や現状をご説明いただき、いろいろなご意見を伺いました。前回の議事録は皆さんもご覧になっていると思いますが、議事録も含め、この会議すべて公開ということになっておりますので、その点ご承知おきください。今回は、『世界の動物園』について、動物園の本田さんからお話しいただきます。次に、この検討部会と並行して行われております職員プロジェクトの進捗状況について、動物園の朝倉さんからお話しいただきます。そのあと、前回の引き続きになるかと思いますが、今日お聞きするお話も踏まえて、『円山動物園の役割と目指す方向性について』について、意見交換をさせていただければと思っております。これが予定している議事でが、よろしいでしょうか？

－一同了承－

これ以外にもまた何かありましたら、閉会の前にでも出していただければと思います。それでは、この議事に沿って進めたいと思います。最初は、『世界の動物園』について、動物園の本田さんから、ご説明をお願いいたします。

本田氏　円山動物園の本田と申します。爬虫類や両生類の担当をしています。今日は『世界の動物園』について、お話をさせてもらいます。世界の動物園はそれぞれが役割を持っているのですが、基本的には欧米が主導して動物園というも

のを作っています。西洋の価値観の下、動物園が成り立ち、その社会的役割を果たしています。そのような中で、日本の動物園は“動物園”と名乗っているので、（西洋価値観の）土壌に半分上がっている状態です。そこで日本はどうやっていくのか。そういったことを今後考えていく必要があると思います。

動物園の数ですが、テレビ朝日の番組から引っ張ってきたものですが、日本は動物園大国です。面積比でいうと世界 1 位になり、動物園が多い国です。動物園の役割ですが、元々は王族のコレクションであり、植民地からさまざまなものを持ってきて、それを展示したりする施設でした。そこから動物公園になり、現在は自然保護センター、保全と教育の場として社会的な役割を担っています。法的位置づけですが、欧米においては保全教育の場であり、法律もあります。また、それぞれの地域の動物園水族館協会が認証制度を行って、基準を満たさない施設しか整えられないような施設は許可が与えられないのです。非常に厳しい認証制度があります。そういったなかで、保全を進めていくにあたり、動物園がこの役割を十分担っており、なくてはならない存在であると位置づけられています。日本においては、地方自治体や企業の一部門であるため、まだまだ娯楽の場としての認識が強いです。ただ近年、動物園の役割が見直されて、やっと保全の場として動物園と国とが連携したりして機能しつつあると思います。法律ですが、アメリカでは動物福祉法とか環境法、さまざまな法律に「動物園」という単語が載っていますが、それよりも一番厳しいのが認証制度です。日本にも、日本動物園水族館協会がありますけど、AZA、米動物園水族館協会は非常に厳しい認証制度を持っています。これをクリアして、これに加盟している動物園はそれだけでもうステータス、社会的地位が高いという位置づけになっています。ヨーロッパにおいては、イギリスでは動物園免許法があります。これがクリアできてないと、あなたは動物園を運営してはいけませんという免許です。EU 圏内では動物園指令というものが出ていまして、EU に加盟している国はこの指令を守るようになっています。このため、EU がお金を出して研修をやったりして、認証できるようなレベルまで上げてくということも行っています。日本では明確な法的位置づけはなくて、博物館法によって、博物館相当施設という扱いになっています。動物園という名前が法律に出てくるのは、都市公園法、国立公園法等だけだったのですが、国会で

種の保存法の改正がありまして、ここで認定希少種保全動植物園等の創設というのが通りました。これでやっと、日本の動物園が国家のなかで、保護増殖、希少動物の繁殖というものに貢献するということが認識されました。私たち動物園業界の人間にとっては、待ちに待ったような形に今、法律では変わりつつあるということになります。

次に、経営形態です。世界では、市立、国立、財団、民間、さまざまな形態になっております。札幌円山動物園は市の直営し、市立施設です。直営や、半官半民、あとは完全な民間があります。いろいろありますけど、海外もいろんな形がありまして、公益株式会社とか、市立有限会社があります。こういった形で元々は市立であったり、直営だった動物園がそれぞれの役割を担うことによって、経営形態も変わってきております。財源ですが、米の動物園やニューヨークの野生生物保全協会、これは、ニューヨークのブロンクス動物園とか 4 か所の動物園を運営している組織なのですが、非常に大きな財源を持っています。入園料ですが、日本がいかに安いかわかります。海外の動物園は経営意識をはっきりと持っているので、そういう園では入園料が高くなっています。お金がないといけないというのが欧米動物園の実情です。先ほど、動物園は、保全センターの役割を担っているとお話ししました。これは、93 年の生物多様性条約、ブラジルの地球サミットにおいて、世界動物園水族館協会（WAZA）－世界中の動物園のけん引役の組織－が、IUCN 等と世界動物園保全戦略を発行したためです。ここで、環境教育と保全がわれわれ動物園水族館の使命ですということが示されました。今、日本動物園水族館協会（JAZA）では、動物園の役割を 4 つ挙げています。これは、世界中で統一されているものですが、それぞれの国で重みが違い、レクリエーションは当たり前の役割として持っている機能なので、わざわざ伝えていない所もあります。しかし、基本的にはどこの動物園もこういう機能を持っています。動物園における保全について、実際にどういうことをやっていくかですが、生息域内保全があります。これは直接生息地において、さまざまな調査研究や保全活動、現地の方への教育などいろいろなことを生息地内でやることです。アフリカの動物なら、アフリカまで行って保全活動をやるといくことです。一方、生息域外保全もあります。これは、生息域の外、たとえば動物園など違う場所におい

て、繁殖等を行ったりすることです。保全は生息域内保全と生息域外保全の 2 つに分けられるということになります。生息域外保全について、動物園で具体的にどういうことができるかというと、まずは絶滅の恐れのある種を緊急的に避難させる。あとは希少種の繁殖を行っていく。これは将来野生復帰に使う個体の供給源にもなり得るということです。あとは飼育動物のさまざまな日々の管理のなかで研究を行ったりデータを集積したりすることがあり、これは非常に重要ことです。野生動物の研究ではなかなか身近で観察ができないので把握できないことが多いですが、動物園は身近に研究対象がいるので、いろいろな行動を間近に見られる場合があります。そして野生の行動を、ある程度推測できることができます。環境が違うので、そのまま野生のものには適用できないとは思いますが、重要だと思います。あとは、野生復帰です。減ってしまった動物を野生にまた戻していくというとき、技術の開発等が動物園の役割になります。その他、来園者への教育、精子を保存しておく等、遺伝子レベルで種を保存することも重要な役割の 1 つです。

では、動物園でいう保全とはどういうことでしょうか。いろいろな分野で曖昧に使われ、保全と保護はどう違うのか、というような議論がされますが、世界動物園水族館協会においては、長期的に自然の生息地で種の個体群を確保する、と定義しています。日本ではよく、生息域外保全とか域内保全という分け方をしますが、欧米ではあんまりそういう分け方はしません。保全というのは、域内と域外をひとつのものとして考えてやること、という手法で行っています。

では、これらの仕事をどういった組織がどう行っているのでしょうか。これは WCS という、ニューヨークの組織です。この組織がどのような部門を持っているのかについては資料のとおりです。このなかでも重要な役割を占めているのが、資金の調達部門です。かなりのお金を集めて、保全使っています。また、動物園の管理組織には何百人もの研究者も抱えているので、その人たちを世界中に派遣して、そこで保全活動を行っています。さらに、そこで得た情報を動物園という場所で来園者に伝えています。飼育員や研究者等、それぞれの専門家がそれぞれの部門に配置されているのです。ですから、WCS だけで、保全活動が一通りできるような組織となっているのです。一方、動物の飼育部

門はキュレーター制を取っていまして、飼育部門はほ乳類部門、鳥類部門、爬虫類両生類部門と 3 つに分かれています。日本は担当替えがあるのですが、欧米においては、ほ乳類ならほ乳類部門の専門家として異動することはありません。担当が変わらず、技術等の蓄積が行われるということになります。組織運営の財源ですが、税金が 22%ですが、それよりも多いのが寄付金です。先ほど述べた資金調達部門が、支援者から寄付金を集めています。そして、そのほとんどを国際プログラム、つまり世界中の生息地の保全に使っています。税金は施設の維持に基本的に使われるので、保全に使う資金は全部外部からの資金調達により投入しているのです。日本の動物園の組織形態とは異なります。

次に保全の実際について見ていただきます。これは、サンディエゴ動物園のカリフォルニアコンドルの保全施設です。ここは野生復帰施設になっていて、ここで繁殖した子をトレーニングして、野生に返していきます。カリフォルニアコンドルは野生では 6 羽にまで減少し、その時点で全個体捕獲して、ロサンゼルス動物園やサンディエゴ動物園で手分けして繁殖を行い、そこで生まれた子たちをどんどん再導入していっています。今では 200 羽くらいまで増えてきており、有名なプロジェクトの 1 つです。これは、ケルンの動物園の両生類施設です。今、世界中で一番数が減っている脊椎動物は両生類といわれております。各国の動物園では、両生類の繁殖施設をどんどん建設して、保全に努めています。これはアンフィビア、両生類箱舟計画というものの 1 つになっています。これもニューヨークのブロンクス動物園の地下にある施設です。これはアフリカのタンザニアにいる、ある特殊なカエルなのですが、そこの地域が危険な状態にあるので、そこの個体を捕獲してきてここで繁殖を行って、生息状況が改善したらまた野生に戻していくということを行っています。海外の動物園の特徴は、日本であれば飼育展示で終わってしまうところが、それ以上に何倍もの規模のバックヤード施設を持っていまして、大事なことは全部そこでやっているわけです。展示は展示施設で、繁殖はバックヤードで行い、そのための施設を持っています。これは、広島県の安佐動物公園です。ここはオオサンショウウオの域外保全を行っていることでたいへん有名です。域内保全も行っていますが、域外保全も行っていまして、動物園とは違う場所に繁

殖施設を持ち、日本のオオサンショウウオの繁殖を、もう何十年も継続して行っています。こちらは、いしかわ動物園のトキです。これは展示マスになりますけど、裏にも繁殖用のケージってものがあって、そこで繁殖を行っております。

次に、教育についてです。環境教育に関しては、さまざまな手法があります。動物の展示が教育にもつながりますが、飼育係がいろいろと関わりながら行う教育もあります。これは、スイスの動物園ですけど、時間ごとにいろんなメニューがあります。この人は動物園ボランティアのスタッフの方です。欧米で特徴的なのは、有料プログラムです。年代別ごとにプログラムがあり、野生動物の大切さとか自然を守ることの大切さみたいなことを伝えるプログラムがあります。料金は非常に高価です。たとえば、パイソンピザパーティというプログラムですが、爬虫類館を 1 周して、最後みんなでピザを食べて 6000 円となっています。ロンドン動物園をみますと、たとえば 1 日飼育係がおよそ 6 万円になります。お金がかかるというのは欧米の動物園や利用者にとって普通のことなのです。日本はこの点、無料でプログラムを提供したり、多少お金がかかる場合もありますが、日本ではなかなか成立しないプログラムかもしれません。これは、円山動物園が行っているさまざまなガイドやプログラムです。

次に、展示についてです。欧米における提示形態の変化ですが、最初はメナジェリーです。このように、今は屋内型のバイオーム展示というものが主流になってきています。野生動物のことを伝えるにあたって、その生息地の景観をリアルに作っていくというのが特徴です。日本だと動物舎を作る時には建築家や設計事務所がメインになってきますが、欧米では、造園家や園芸家が主導し、地形を作りながらやっていきます。建物は極力隠す方針のようです。これは 100 年ぐらい前のスイスの動物園です。今も使われていますが、昔はこういう感じだったということです。これは、イギリスのハウレッツ動物園のゴリラ舎ですが、ゴリラでは世界で一番実績を残している動物園です。しかし、展示施設については動物園業界ではいろいろ疑問視されているところもあります。なぜかというと、施設が機能だけを重視したものではないかということです。ゴリラにとっては非常にいい施設になっていますが、檻型の展示施設の評

価についてよく議論されています。これは、スイスの動物園です。これも、ほぼアフリカのサバンナのように景観を作りこんでいます。これは、アメリカのダラスの動物園のアフリカ象の獣舎です。非常にすばらしい景観を作っています。視覚的にもかなり訴えるものがあり、メッセージ性が強いということがいえます。加えて人工物を極力使わないという手法です。岩とか擬岩をうまく使いながら、柵とか檻を使うのではなくて、動物が景観になじんでいます。これは、ランドスケープイマージョンという手法になりますが、動物も来園者も景観に溶け込んで感じてもらうという手法です。檻などは極力使わず、うまく岩とか木を利用しながら施設を作っていきます。これは、ドイツのライプツィヒ動物園です。非常にきれいで、トータルデザインが行き届いた動物園になっています。建物はすべて植栽で隠されています。このように、欧米の動物園は建物の印象がまったく残らず、ほんとうにその生息地に入り込んだような感覚になり心地よさがあります。植栽計画、園芸家や造園家の仕事がたいへん重要になります。

また、サインも非常に有効に設置されています。サインのために独立した部門を持っています。日本ではだいたい飼育係が作っていますが、サインは重要なものなので、独立した部門を立てて、伝えたいことを明確にして、評価しながら新しいものを作っていくという形がいいと思います。加えて、日本でいう博物館のような施設も必ず動物舎のなかに組み入れられています。こういった博物学的な展示、いろんな展示ゾーンがあって、そこに動物もいるという形になります。サインのデザインも非常によく考えられています。この人はブロンクス動物園のサイン作成専門の職員です。あと、メッセージを伝えるためにストーリーをしっかり作り、どれだけ伝わったのかも評価しています。これは、ニューヨークのゴリラ舎ですが、3 ドル払ってゴリラ舎に入り、まず映像を見せられます。動物園がコンゴで実際に行っているゴリラの保全活動についての映画を 10 分ぐらい見せられます。それを見終わると窓のシャッターが開いて、目の前にゴリラが現れるという仕掛けになっています。非常にぐっと心にくる展示です。最後、見終わったときには、先に払った 3 ドルを何に使うか、選択するゾーンがあります。ゴリラの保全に使いますか？森の回復に使いますか？などいろいろ選べます。自分が払ったお金が、ゴリラの役に立ったとい

う、ハートに訴える形の手法を取っているということです。

次に、今主流になってきている、屋内型展示の発展についてです。屋外型の展示では屋外ばかりきれいに作って、夜は狭い屋内に入れて飼っていることがあります。1 日の大半は、狭い地下の屋内にいるわけで、屋外にいる時間は 1 日で 7 時間、8 時間程度ですから、それは動物の福祉にとってもよくないということになります。ですから、今度は屋内もしっかり作るようにどんどん進化しています。これは、スイスのチューリッヒ動物園ですけど、屋内に森を作り、このなかに動物が自由に暮らしています。カメレオンが普通に歩いています。これは、象舎です。屋外は屋外できっちりしたものがあって、屋内は屋内でちゃんとした環境が整えられています。これは、ブロンクス動物園のジャングルワールドという施設。インドネシアのジャングルが再現されている屋内施設です。これは、オランダのバーガーズ動物園ですが、アメリカの砂漠の環境が屋内において完全に再現されています。そこで、コンドルが上を飛んでいたり、非常にすばらしい施設になっています。これも同じバーガーズ動物園のジャングルのゾーンですが、屋内施設には見えないです。これが屋内の施設で、動物が広々とした空間で自由に暮らしています。

次は、レスト機能です。やはり、動物園のレクリエーション機能としてレストランがしっかりしている。これはチューリッヒ動物園のフードコートです。このような森を見ながら、食事ができてすばらしいところです。ただ、ソーセージとポテトを食べただけで 3000 円ぐらいします。これは、ダラス動物園のライオンカフェ。ライオンを見ながらゆっくりご飯を食べているという感じです。日本の動物舎デザインについてですが、やっぱり、絶対的に予算が少ないです。運営が自治体であったり、企業がやっているので予算が少ない。たとえば、ドイツの小さな町の動物園でも、獣舎をつくるとなると 30 億円ぐらいの予算で施設を作ります。それぐらいの予算をかけないと、社会的に耐えられない施設になってしまうのです。つまり、愛護団体であったり、さまざまな外圧があるのでしっかりした施設を作らないと潰されてしまうのです。あとは、先ほどお話した通り、日本のように設計事務所主導で進んでしまうと、作品作りになってしまいます。このため動物（園）のための造園技術というのが、なかなか表に出てこないのです。あとは、動物園をトータルでデザインしないで、

施設毎でデザインしていくので、どうしてもばらつきが出てしまいます。それと、機能主義の問題があります。人工物を躊躇しないような動物舎作り、先ほどのゴリラのハウレッツ舎みたいな、あのような作りです。動物にとってなんら問題はないのですが、展示という概念が全く欠けているのです。こういったことが、市民に歪んだ動物観というものを植えつけている恐れがあるのではないかなと感じています。これは、円山動物園のチンパンジー舎です。動物にとってはすばらしい環境ではありますけど、ではここからアフリカのチンパンジーの暮らしが想像できるか、アフリカからのメッセージが伝わるか、というと、なかなかそうはいかないと思います。

これは旭山の施設です。ここで、南米の彼らの思いが伝わってくるでしょうか。動物園が何を伝えるかにもよると思いますが。これは、ある動物園の新しい動物舎ですが、メタルラックがあって、展示施設であるという概念がありません。これが、普通と思われているのが日本の動物園の現状です。ほんとうに展示という概念が欠けているとおもいます。つまり自分たちのメッセージがないっていうことです。それだけお金もかけられないということはありますが、景観を作ることはお金がかかるので、どうしても機能主義に走ってしまい、最低限のものを整えて終わってしまうということになります。これでは動物園としての機能を果たしていくことはできません。これは大阪の天王寺動物園ですが、造園家がデザインした施設です。飼育係にとって使いやすいかどうかは別としても、やはり、彼らのアフリカの暮らしとか、メッセージ性が感じられます。そんなに広くはないのですが、こういう景観を作りこむことによって、動物が不幸に見えないことがあると思います。たとえ、面積が広くても檻があると、来園者の方はちょっと悲しい、ネガティブなイメージを持ってしまう可能性があります。こういった景観を作りこむことで、ネガティブな印象を与えないっていうことは動物園としてたいへん大事なことの一つだと思います。

次に、飼育管理の話をしたいと思います。最初に動物福祉に配慮した管理ということについてですが、ここ 10 年ぐらいでこの動物福祉ということが急激に注目を浴びてきて、動物園の使命、根幹の 1 つになっているということがいえると思います。動物福祉とは何かといいますと、国際獣疫事務局というとこ

ろが作った 5 つの解放のことです。これに基づいて動物園は運営しているのですが、新たに退屈からの自由、動物が自身の生活をしてコントロールできる自由、こういったものがどんどんつけ加えられています。動物園にいる飼育動物は、野生からきた大使というように考えます。生物多様性の保全に関するメッセージを伝えてくれる重要な役割をもってきたのです。だから動物園は最高の環境を提供していかなくてはいけない、責任があるということです。環境エンリッチメントとは、動物福祉の立場から、飼育動物の幸せな暮らしを実現させるための具体的な方策のことです。これは円山動物園でも実践していることです。だいたい 5 つの手法に分かれています。たとえば、オランウータンだったら、ただ餌を置くだけだと、1、2 分くらいで食べてしまい、あと暇になります。そうすると、異常行動が出てきて精神的な健康を維持できなくなります。そうではなく、餌を鉄の檻にリンゴを入れたりとか、段ボールに隠したりとか、あとは浮き球のなかに入れたりして、わざと取りづらくしたりすることで、採食時間を 1 時間、2 時間、3 時間と伸ばしています。野生においては、彼は採食のためにほとんどの時間を費やしているので、それを飼育下でも再現してあげようということです。加えて広いスペースが必要です。地上で暮らすものには地上の面積を十分確保してあげること。木の上で暮らすものには立体的な行動ができるような場所を提供してあげるということが必要です。欧米の動物園では動物舎ごとに、エンリッチメント道具を作る作業室がついていて、そこで日々道具の開発をしています。大きい動物園になると、エンリッチメントの組織があり、そこでエンリッチメント道具の開発を専門にやっている。彼はフランクフルトの類人猿の担当者ですが、「ここが俺たちにとって一番大事な場所」といつもいっています。これは円山動物園における、ハズバンダリートレーニングで、採血をしているところです。今までは動物は麻酔をかけないと血を採ったり健康診断できなかったのですが、今はいろいろなトレーニングをすることによって、自ら健康診断に協力してくれるようになりました。飼育係がトレーニングするなかで、そういったことができるようにしていきます。円山動物園ではホッキョクグマとか、今はオランウータンとか、さまざまな動物においてハズバンダリートレーニングを実施して、動物に負担をかけないで日々の健康管理ができるような状態にしています。これ

はオランウータンです。これは採血、筋肉注射をしているところです。注射していても全く普通の顔をしています。

簡単にまとめますが、欧米の動物園はさまざまな研究者や科学者、専門家が基盤となり成り立っています。加えて、専門に特化して部門が細分化され、それらがトータルで保全を実践できる組織形態となっています。あとは目的が明確です。そもそもの目的を間違えたがゆえに違う方向にいくということもありますが、目的を決めたら、それを達成させるために労を惜しまないというところがあります。こういったこともやはり、愛護団体との切磋琢磨があるからではないかと思います。欧米の動物園に行きますと、動物園内では楽しく運営していますけど、正門前では愛護団体がいるという光景が、普通に見られます。ヨーロッパの動物園の園長は、愛護団体との交渉が仕事の 7 割、8 割ぐらいといっていました。そういう外圧が日々あることによって、自分たちもきちっとしたことをやらなければいけないということにつながっていると思います。日本はまだそれがなかった分、ある意味ガラパゴス化してしまったようです。でも、近年はやはり SNS とかいろいろな情報が共有化されるようになりましたので、だんだん日本の世論も欧米化しつつあり、日本の動物園も変わっていかなきゃいけない時期に来ているのではないかと思います。一番問題なのは、動物園は自治体や企業の一部署なのです。けれども動物園と名乗った時点で、既に世界的なところから、例えば IUCN の使命も同時にこなしていかなければならないのです。しかし、自治体にとっての動物園の役割と、世界標準としての動物園の役割の乖離が大きいという問題がある。ただし、先ほどお話したとおり、欧米の動物園は西洋の価値観があって存在しているので、それをそのまま輸入して実践しようとしても日本では機能しません。やはり日本の価値観に合った独自のスタイルというのも確立していくことが重要となってくると思われます。

時間になってしまいましたので終わりにしたいと思います。長い時間、最後までありがとうございました。」

吉中氏　本田さん、どうもありがとうございました。とても勉強になりました。ところどころ専門用語的なのも出てきましたが、何かご質問があれば出していただければと思いますが。

福井氏　　大変うまくまとめていただきまして、ありがとうございます。印象として残ったのが、円山動物園のチンパンジーのマチカの展示と旭山の展示です。私が旭山にいたときには全国にたいへん注目されて、動物園が身近に感じられるようになったという、一時代を築いたと思います。あのとき旭山が成功した要因の一つには動物の行動を間近で見られるということがあったと思います。動物は“動くもの”ですから、今まで寝ていたものが動いて、その動物がそれぞれの特徴である解剖学的な形態とか、人間からかけ離れた能力を身近に見られるということが、すごく印象に残ったのです。たとえばランドスケープイマージョンとかの生態展示をしたときに、動物が隠れてなかなか姿が見られない。例を挙げると、ズーラシアを見に行くと、動物がどこにいるのかわからない？ということがある。見えなかったなというときに、コアな人だとまた次来よう、動物を自然で見るのは大変だしこんなもんだよね、いい景色だね、で終わると思います。しかし、ふらっと動物を見たいと思って家族で見にきた人は動物が見られなかったら、動物園はつまらない、というふうに短絡的に感じて帰っていくと思います。そのへんのギャップについて、今後の動物園が展示のあり方について、どう考えればよいのか。人工的なもののよさだとか、動物がいつも見られる、あるいは動いている状態を見られる、見やすいのは隠れるスペースがないほうがいいわけで、このようなところのバランスはどうとっていくべきでしょうか。

本田氏　　景観を整えることによって動物が見えなくなるのは、恐らくデザインとしてあまり成立してない場合もあるという気がします。個人的な話になりますが、旭山みたいな形と、さらに景観とか植栽を整えた環境が合わさればよりいいと思います。しかし、本当に見えなくなってしまう場合、それは動物舎のデザインにより、どこかからかは必ず見えるとか、そういう手法を使うことがある。また、完全に見えない状態もあるとするのであれば、飼育員が定期的にガイドするとか、直接メッセージを伝える手法のほうが、より効果的に伝わるのではないかと思います。また、見えないってものに対しては、やっぱりしっかりした説明を、自分たちの考え方をちゃんと説明して、納得してもらうっていうことも大事だと思います。

福井氏　　例えば、その象徴的なのが旭山のヒョウの展示ですね。ユキヒョウが頭上にい

る。あれはすごくシンプルで、また、景観的には結構殺風景ですが、ヒョウが頭上にいると安心するとい性質をうまく利用したものです。お客さんは純粋に喜んで、ヒョウの生態も含めて見て学ぶことができ、私のなかで印象に残っているものです。このようなものを、もう少し景観も含めて配慮して、うまく隠してカモフラージュしながら、シンプルな視点で作っていくというのがいいのかなと思います。

本田氏　動物の行動とかすばらしさは十分伝わり、次は生息地への思いをどう伝えていくかというときに、景観というものがひとつのキーになってくると思います。それと、来園者にとっても、やはり先ほどお話ししましたとおり、どうしても檻展示だと、十分な機能を持っていても、負のイメージを抱く可能性が高いので、そういった意味でもやはり景観は重要だという気がします。

吉中氏　生息域外と域内を 1 つとして考えていくという話がありましたが、それをつなぐ意味でも景観は一番重要なのではないかという気がしました。

もう 1 つ、基本的なところで教えていただければと思うのですが、動物園の管理体制を示したスライドがありましたが、キュレーター、コレクションマネジャー、それぞれの方の具体的な役割や仕事について教えてください。

本田氏　キュレーターというのは、日本では学芸員と訳されてしまいますが、全く違うもので、日本の動物園に当てはめると飼育課長に相当します。キュレーターは、何を展示するかとか、どういったものを伝えたいとか、飼育方針を作ります。学識の高く、生物学も納めていて、日本でいえば大学の先生のような扱いをされている。私も一応学芸員なので、海外行くときはキュレーターと訳していますが、扱いが全く違います。その下のコレクションマネジャーというのは係長という感じです。動物のコレクションをマネージしたり、現場の補佐員、キーパー等という人たちに直接指示を出し、動物を管理しています。

福井氏　もう 1 点。“キーパー”というのは、日本の動物園に当てはめて考えると、従来は「飼育係」とか「飼育員」といういい方をしたと思います。私はそれについて区別して使う意識を持っていて、「飼育技術者」といっています。円山動物園でいうと「動物専門員」ですね。海外での“キーパー”についての認識や、一方、日本の「飼育技術者」、あるいは従来のこれまで動物園が用いてきた「飼育係」、「飼育員」、この辺についての言葉の使い方やその概念について、目指すべきあ

り方みたいなことはありますか。

本田氏　日本の場合は、結構なんでも屋というところがあり、動物専門員は、ときにはキュレーター的な役割をしなければいけないし、同時にキーパーでもあるのです。幅広い部分について対応していかなければならない。このあたりは欧米では明確になっていて、キーパーというのは本当に飼育作業だけをやるっていう感じです。ただ動物によって結構違っていまして、キーパーがすべてを組み立てているところもありますし、本当に作業員としてしか動けないキーパーも現実にいます。キーパーから上がっていくっていう制度も、残っているところには残っていますが、最近はそういう制度がなくなって、どんどん上だけが代わっていくという形になっている。大学卒業して、突然はいってきて、わたしはカエルが大好きですといって、展示を全部カエルに変えてしまうとか、そういうことで蓄積したものが、壊れてしまった例も聞きます。だからわれわれの動物専門員というのは、かなりそのへんのものを広く網羅した役割になっていると思いますし、大変な気はしています。

福井氏　漫画の『僕の動物園』とか, いわゆる従来の飼育係のおじさんみたいなイメージがいまだにあると思うのですが、そのままでいいところがあるのか、何かやっぱり転換を求めますか。

本田氏　飼育員のおじさんみたいなイメージはありますね。

本田氏　当然、軸足はそこに置くべきと思います。ただそれにプラスアルファ、そことつながるものに対して、常にジョイント役になっていかなければならないとは思っています。だから、これまでの意識とは違って、視野はかなり広げていかないといけない。飼育だけやっていても、その先に何が必要か、というものを明確にしてないといけない。どことつながるべきなのか、そういったことを能動的にやっていかなければならないのが動物専門員であると思います。

吉中氏　まさに日本型、札幌型のスタイルというか文化を、世界の情勢も見つつ作り上げていかないといけない。今回は作り上げるいいチャンスなのではないかという気がしました。

事務局（[redacted]）　円山型としては、今までは余力がある飼育員が研究をしていたと思いますが、わたしの思いとしては、専門員は、研究者が実践をしながら研究を進めていくようなイメージを持ってほしい。だから、キーパーではあるけれども、やっぱ

り動物の専門員であり、実際に動物と触れ合いながら研究をする人だという意識を持ってほしい。

小菅氏　今、本田さんからいろいろな海外の情報・データが示されましたが、、実際に海外では、いろいろな動物園があるなかで、キーパーの下にスイーパーがいて、スイーパーはただ掃除するだけ。実は今、どんどん階層化が進んでいて、この部分は誰がやる、この部分は誰がやるというふうになってしまっています。正直いって、あれはやっぱり欧米型なのだと思います。動物を飼うことから得られる情報は大きいですが、飼うためには野生の状態とかをかなり深く知らなければ、きちんとした飼育ができない。という意味から考えても、やはり日本の動物園というのは専門員が重要。これから円山動物園は専門員制度になっていくわけだから、園長が研究者だといいましたが、まさに野生動物に関する研究者であって欲しい。しかも、飼育下における研究をやりながらも、野生の研究をやり、そこのところであらゆる情報をきちんと自分なりに整理して、それを発信できる、そういうところまで求められる。アメリカ等が本田さんのいったような制度になっているとしたら、専門員制度はまさに日本型の動物園のあり方になると思う。それが動物園にとってものすごく重要なことではないかというふうに考えています。本田さんの発表のなかにもあったが、欧米に追随するということではなくて、日本型の動物園というものをいかにして作っていくかということが、必要なことではないかと思っています。今、日本の動物園のなかでもやんわりとそういう雰囲気はありますが、きちんとした形にして、わたしたちはこういう動物園を目指します、というのが見えていない。このところを、今回の構想の委員会では深く議論していただいて、職員それぞれのあり方というものを含めしっかりと議論して、形作っていただければありがたいと思います。

吉中氏　続きまして議事の 2、『職員プロジェクトの進捗について』です。前回、ポスト基本構想策定のプロセスの説明のなかで出てきていましたが、職員の方々による議論が並行して、密な内容で進んでおります。わたしも一度出席し、議論を聞かせていただきましたが、その進捗状況、今どんなことを話しているのか、どこまで職員の方の間で今後の円山動物園について話がされているのかについて、朝倉さんからご紹介いただきます。

〇職員プロジェクトの進捗について（職員報告）

朝倉氏　飼育員展示課飼育総括係の朝倉と申します。よろしくお願いします。まず基本的な情報ですが、職員プロジェクトでは会議を 10 月 3 日より、週 1 回、今日まで 9 回実施いたしました。参加メンバーは動物専門員 5 名、飼育展示課の事務職員が 2 名、獣医 1 名、経営の事務職員 2 名、管理の技術職員 1 名となっています。いろいろな立場の者がいますが、若いメンバーが多くなっています。今まで、どのような話をしたかということですが、まず 1 回目はこのポスト基本構想のためのプロジェクトを始めるに当たっての意見交換。そして 2 回目が先ほど本田のほうで報告させていただいた内容と同じようなものを 2 時間バージョンでやりました。3 回目はそれを振り返りながら、先ほどの話でも出ましたが、海外での方向性を認識しつつ、そのなかで日本にある動物園が、それをどのように受け止めて、どのように取り入れてやっていくか。また、それを踏まえて動物園の使命とはなにか、というようなことを検討しました。4 回目は 3 回目を受けて、各自動物園にとって重要なことはなにか、項目出しをしました。だいたい 11 名で 130 項目ほど出ました。その後 1 つ 1 つ理由をアピールしてもらいながら説明してもらい、併せて動物園の理念等の検討をしました。5 回目、6 回目では、その 130 項目について分類分けをしました。分類をすると大きく 5 項目ほどに分かれました。その部分で大切にしたことは、1 つ 1 つの小さなことも、何かの目的、何かの目標につながっているという事を、各自が出したものを確認しながら、全員で共通認識を持つという作業を行いました。7、8 回目には逆に、分類したものを 1 つ 1 つさらに掘り下げるという逆の作業を行いました。5 回目、6 回目では各項目と大きな目標の繋がりを、7 回目、8 回目では、掘り下げることによって項目同士がどのような繋がりがあるのか。1 つのことをやるための目標はこれだった、ということをわかったとしても、これをやるためにはこういう要素も必要である。こういう動きも必要である、というつながりを確認するための~~ことの~~掘り下げを行いました。直近の 9 回目は、時間が短かったということもあり、レクリエーションについて検討を行いました。動物園の役割として、日本動物園水族館でも出されている 4 つの役割、種の保存、教育、調査研究、レクリエーション 4 つというのは動物園で働く者にとって、1 つは心の支えでもありますし、目標というか大事にしている部分

でもあります。ただその一方、言い訳としても使ってきました。以前から役割とは、どういうことなのだろう、という思いは持っておりました。動物園の目標ではなくて、役割ということです。恐らく、これは社会的役割という部分が大きかったのかなと、個人的には理解していますけども、この役割にとらわれて、このまま進むのかどうなのかということは、今回の職員プロジェクトにとっては大きなことでした。何かやりたいことがあって進めていくという事と、しなければいけない役割があって進めていくという事は少し違ってくるのかと思います。そういう中で、９回の検討会議を重ねてきまして、7 回目、8 回目ぐらいで、プロジェクトのメンバーの話し合いのなかから、だいたい皆のいっていることはこういうことですね、という 1 つの形ができ上がりました。先ほど見ていただいた動物園の役割というのも、このなかにすべて入っています。しかし位置づけとして少し変わってきているところがあるかと思います。まず一番上、動物園の目的となります。動物園の目的というのはなんだ、というような話のなかで、いろんなものが出てきたのですが、地球を守る、生物を守る、生物多様性を守る、生態系を守るで、いってしまえば保全、コンサベーションということになるかと思います。この部分は、動物園が目的、目標とするところですから、あまりにもかけ離れたものではそぐわないだろうなというのが 1 つ。あとはこの部分というのは多くの皆さんに伝える部分だと思いますので、わかりやすい、伝わりやすい言葉にする必要がある、ということで一旦保留としております。その目的を達成するため、そのために必要なものとして保全と教育というのを挙げさせていただきました。目的を達成するためには、保全と教育に取り組むべきであると。この下に、そこの上位項目と書いてあるのですが、この下にさまざまな取り組みというのがぶら下がってくるかと思います。動物園の役割のなかにあった調査研究、この部分は、以前でしたらそれぞれの取り組みの役割のなかの 1 つということの横並びの図式だったのですが、動物園の目的を達成するためには、効果的な教育はどのようにしたらいいのか。また、保全というのはどういう取り組みでしたらいいのか。そのほかにも広報もしなければいけない、福祉もしなければならない。その部分に関して全体を調査研究していく必要があるというふうに考えております。また、福祉の部分についてですが、こちらは先ほどの動物園の役割というなかには入っていなかっ

たものですが、世界の動物園の流れとして、動物の福祉というものをしない、もしくは足りないということは許されない~~という~~方向に流れているかと思います。そういったなか、新聞等で報道されるとすると、命を守るみたいな表現をされることが多いかと思いますが、先ほど、本田の報告のなかにもありましたが、動物福祉というのは、それからもう 1 段上に位置するものと考えていただいていいと思います。人間の福祉というと、法的な扶助であったりサービスによって生活が安定、充足するというようなことがあるかと思いますが、動物の福祉というのは、その動物を飼育する環境だったり、心理的な面を良い状態に維持する人間の取り組みということになります。動物福祉と表現すると人間の福祉と同様なものと誤解を受けてしまうことがあるのですが、痛みやつらさからの解放というのもありますし、野生でもともと持っている能力を発揮させるということもあります。そのように、ただ命を大切にするというのではなく、動物の生活全体を良い状態で維持するということが必要になってくる。この部分を義務として捉えるというのは、自分たちにとって~~も~~非常に重い部分だと思っています。福祉を義務とすることによって、今後飼育することができない動物も出てくるかと思いますし、取り組むべき重さというのも変わってきます。しかしその上でも、この福祉については義務として捉えて進んだほうがいいのではないかというのが、職員プロジェクトでの意見でございます。その他でいいますと、広報~~、~~・発信について書いていますが、この部分は教育的効果にしても、動物園の存在意義を発信するにしても、非常に大きな部分になるかと思います。この広報・発信は、新聞・テレビに取り上げられるというだけ~~のもの~~ではなく、教育的なものもある、保全を達成するためにもあるということを意識しながら行っていくことになるかと思います。そして、動物園の役割であったレクリエーションですけれども、9 回目に詳しく話し合いましたので、もう 1 枚だけスライドをご覧いただければと思います。レクリエーションは娯楽と訳され、何かを楽しむためのものととらわれることが多いかと思います。動物園ではレクリエーションと教育は動物園の両輪と言われますが、それでも別々に捉えられています。動物園はレクリエーションも用意しなければいけない、教育もやるというふうに、別々のものとして捉えられたことが多かったのですが、今回このレクリエーションの捉え方自体を変えようというのが、職員プロジェ

クトでの意見になります。レクリエーションは娯楽、楽しみ、re-creation といって再創造という意味でも訳せるかと思いますが~~けども~~、楽しみ、感動、満足というものを得られている状態というのは、情報にしても受け取りやすい状況であり、興味関心も誘発できる状況だと思います。保全教育を効果的に実施するための環境をつくることを目的とし、このレクリエーションをしっかりと形づくっていく。そういう意思を持つことによって、このレクリエーション、楽しみというようなことの、位置づけや取り組み方も変わってくるのだろうと思います。レクリエーション環境を作るための要素として考えられるのは、1つは雰囲気であったり、園のデザインだったりということになるかと思います。先ほど本田からも報告させていただいた世界の動物園における雰囲気・デザインというのが、どういう効果があるのか。研究としてプラスの効果があるという報告も出ていると思いますので、そういうものもこのレクリエーションのためには必要である。そして、楽しみ・感動・満足をしてもらえる環境作りのためには、プログラムであったりとか、メニューといったものを、動物園側で用意しなければいけない。そして、もう 1 つの観点は、動物福祉の充実で、これもレクリエーション環境を作るための要素と考える。先ほど福井委員から、動物の行動について、ただ寝ているだけではなく、本来の行動を誘引し、それを見てお客さまが喜んでくれるという話がありましたが、動物福祉を充実させ、動物たちが元々の能力を目の前で発揮してくれるというのは、来ていただいたお客さんにとっては楽しんでいただけることだと思います。その行動を発揮させるのが、動物の福祉を達成するためだけではなく、実は、その伝わりやすい環境を作るレクリエーションという意味でも効果的だと思います。しっかりとこの部分を意識しながら進めていくことが大事ではないかと、というのが前回、9 回目の会議結果になります。9 回を終えて、この考え方というのは、これから基本構想を作っていく上で根本になる部分かと思います。職員のなかでこういう考えを持っているのですが、これに対していろいろご意見をいただき、次に進むためのご助言等いただければありがたいと思います。以上、進捗状況のご報告でした。

吉中氏　　このあとの議題、意見交換等で、今ご説明いただいたことなどをベースにまた

具体的な意見交換が進んでいくのだと思いますが、今のこの時点で、ご質問や意見があればお願いします。

朝倉氏　1 つ補足よろしいでしょうか。5 回目、6 回目、7 回目で資料 1 の図ができ上がったのですが、この目標というところをよく見ると、これは保全になっています。

さらに、その下にもう 1 個保全が出ているような状況です。目標としては保全ということになるかと思うのですが、この下に 1 個だけ教育があると、この取り組みは教育だけなのかとみえてしまいますので、その後の少し検討し、職員プロジェクトのなかでは、やはり下に来るのは保全活動であったり、保全のための取り組みというようなことになるのかという話は出ております。

福井氏　この検討会のきっかけの 1 つの象徴的な出来事としての「マレーグマのウッチーの問題」があったと思います。私の円山動物園に対する意識としては、保全活動には従来から精力的に取り組まれて、ホッキョクグマもしかり、猛禽類もしかり、は虫類もしかりだと思うのですが、一方で動物福祉上の問題が大きく取り上げられたということがある。そこで、今世界標準に照らし合わせて動物福祉ということをしっかりと取り入れるのがよいと考えており、今後の職員プロジェクトのなかでも非常に大きな議論の元になっていくと思います。

本日は議論の現状はここまでだということを、お伝えいただきましたが、たとえば具体的に、ウッチーの問題などにおいて、動物福祉の部分をしっかりと底上げしたり、そういうことを再発させないということについて考えたときに、では実際にどうするか、時間はないと思いますが、何か今考え、思いつく大まかな枠組みなどはありますでしょうか。

朝倉氏　そうですね、そのマレーグマの死亡に関する案件に関してということで、今、円山でもいろんな改善が進んでいるところであります。そして改善されたなかでは、専門性であったりとか、複数での確認、承認であったりとか、そういうところは作られています。ただし、この福祉ということを考えるときに、いま改善で進めているもの、多くの目で確認するということも、しっかりと進むべき方向を確認しながら、円山動物園の基準を作らなきゃいけない今の職員プロジェクトの検討が、このまま出るとしたら、義務として、自分たちがやるべきものとして出ますので、守らなきゃいけないビジョンというのは、すべての動

物に関して持たなければいけないと思います。それが今できていなくても、達成するように進んでいくというような形で持たなければいけないと思っています。今、新しく作っている獣舎というのは、この部分というのは、しっかりと踏まえながら作っている獣舎が多いのですが、古い獣舎とか、老齢個体を飼育している上では、今の状態で目的とする動物の福祉を達成できていない動物もいます。ただ、それも終生飼育というような責任のもと、福祉を義務と捉えながらやっていくということを、そういう動物にもちゃんと当てはめながらできることをやっていく、やらなければならないところがあるかと思います。

福井氏　個人的な意見も含めてお話させていただくと、動物福祉は義務というふうにおっしゃって、非常に大きな決意、気持ちを感じるところですけども、たとえばこれは飼育技術者の、たとえば“プライド”みたいなものにもっと意識が行くのかなと私は思いました。義務というと、なんかやらなければならない、周りからいわれているからやらなければならない、言葉を換えれば、しかたなくみたいなぐらいの、印象にも感じます。でも、やっぱり動物に関わる飼育技術者としては、もう自分のプライドとして全身全霊をかけて、この動物に関わる以上、その動物に最も多く関わる自分がその動物の最大の理解者であって、自分がその動物を最も幸せにできるんだという魂というか、プライドみたいなもの、その意識のほうが私としてはいいのかなと思いました。あと、本田さんの発表ですが、エンリッチメント部門みたいなものがあるという話がありました。それで、たとえばそういうものを、円山の構想に入れたときに、たとえば飼育の部門のなかでも、動物福祉部門とかエンリッチメント部門か、名前はわかりませんが、そういうことを専門的に監視する、評価する、内部を評価するみたいな仕組みができないか、と思いました。組織化することと、そういうことを評価するような自分たちの取り決め、ルールづくりをすることで、しっかりと内部でも監査して、しっかりやっていますということを明確にする。外部から見たときも、そういうことしっかりと自信を持ってやっていますといえる、そういう意識でやっていけば、自分たちはエンリッチメントを科学的に評価しながらしっかりとやっていますよということになると思います。エンリッチメントはやっていますが、やっているのであって、ほんとに動物にとって幸せである試みをしたかどうかは別問題。外部から、大学なり、動物愛護団

体が評価して、ズーチェックとかして、自分たちは行動だけの評価のみならず、ホルモンを測ったり、寿命、繁殖率を比べて、海外の報告とかとも比較して、そこでエビデンスを持って、だからうちの動物は幸せなんだということを、職員が自信を持っていえるような評価機関という場を自分たちで持つというのはどうなのかと、今、聞いていて思いつきました。

吉中氏　今日、動物園の職員の方も何人か傍聴に来られています。プロジェクトで参加されていた方もいると思うのですが、今、朝倉さんからご説明いただいたこと以外に、なんかこんなことも自分は思っていたんだけどとかいうことがあれば、言っていただければと思います。どうですか。

本田氏　すいません。先ほどの福井さんのお話についてですが、やっぱり私たちは今、代番とか本番があるので、毎日最上級のケアを受けさせていかれない訳です。日替わりで、日によってはよかったり、日によっては違う。ちょっとレベルの下がったケアになったりが想定されます。365 日きっちりした適切なケアをまず受けることが彼らの権利である。そのためにどういう組織が必要で、どういう手法が必要で、先ほどのエビデンスをどうするかという話もありましたが、常時、当然一緒に進めていく、両輪で進めていくものだと思います。

事務局（加藤園長）　24 時間です。

本田氏　24 時間 365 日はその一つの目標であるかなと思っています。

福井氏　究極であり、そうあるべきですね。

事務局（加藤園長）　単純に考えると、経営者たる札幌市は、動物園を経営し続けると考えているのであれば、その福祉というのをちゃんと守りましょうということになるのだと思います。たとえば、オランウータンを今後も飼育しましょうといったときに、オランウータンについて 365 日 24 時間の福祉を守れないのであれば、オランウータンを飼育するのをやめるという判断を市としてしましょうということになる。福祉というのは単純なことです。だから、やると決めた以上は、しっかりやらなきゃだめだということなのです。

吉中氏　朝倉さんのお話でもありましたけど、そういうことで動物の福祉がちゃんとできていないと、レクリエーションとして楽しさを伝えられないということもあります。さらに、動物の福祉もそうですが、職員の福祉、飼育員、担当さ

れている方、動物園で働いている方がやっぱりまた、先ほどプライドっていう話もありましたけど、プライドを持って、楽しく働いてないと、レクリエーション・楽しさもうまく伝わらない。教育効果も上がらないということもあるのかなと思いました。

佐藤氏　資料 3 の 3 ページ目ですが、保全における倫理と動物福祉っていうところがあり、そのなかで、結局繁殖プログラムがうまくいかなかった場合には、結論まで飛びますと、安楽死も考慮することになるかもしれないって書いてありました。実際に以前、ヨーロッパの動物園で繁殖させたキリンが結局不要個体ということで、屠殺処分されたっていうことを聞いたことがあります。また、前回の講演でも、欧米型の福祉の感覚と日本人が考える福祉の感が違うんじゃないかとおっしゃっていた。だから、同じ福祉という言葉を使っても、そこは、自分たちは何を福祉って考えていくのかっていうことを考えなければいけない。だから、自然状態では、こういう状態の子はまず生き延びることがないのだから、じゃあ、そういうものを飼っておくことは福祉にはならないっていうふうな判断をしちゃうところもあれば、いや、もうどんな状態であれ、生まれてきたこの子は最期までできるだけケアして、その命を全うするところまで面倒見てあげなきゃいけないよねっていうのがあります。どちらかというと、福祉っていわれたとき、自分が感覚的に思うことなのですが、その欧米に追随するとかいうことじゃなくって、自分たちはどういうふうに押さえてるのかっていうところをもうちょっと最期の最期まで、しっかりと考えておく必要があるのかなと思いました。

吉中氏　そういう議論は、職員プロジェクトの中では出てきていましたか。

朝倉氏　それはそう思います。そういうことを 2 回目に本田から世界の動物園の報告がありましたし、外部の先生からそういう部分のお話をいただいたりもしましたので、宗教的なことであったりとか、国の抱えているものであったりと、日本と違うところっていうのは確かにあります。それで、受け入れられるもの、受け入れられないもの、欧米のものを丸呑みできるかというと、先ほどからの話でもありましたけども、それはなかなか難しいと思います。その福祉の基準というのが、先ほど福井さんからもありましたけども、1 つ形として現れるのは、チェック項目になると思います。何に取り組んでいますか？達成度は

どうですか？というようなところで 1 つ形には現れると思います。実は、終生飼育というところは、実は法律上の文言であったり、日本の動物園ではしなきゃいけないことっていう位置づけにもなっています。それで、日本で行う安楽死というのは、どちらかというと、苦痛からの解放であったり、もうどうやっても治らないというところで判断されることが多いのかなと思います。言葉としていうと、やはり福祉というイメージ、また、外国の取り組みを見たりすると、いろいろな不安な部分が出るかとは思うのですが、その部分も基本構想に載せる時はわかりやすく載せなきゃいけない部分だと思いますので、動物園で言う福祉はこんな基準でこう考えているものですよという説明を入れなければならないと思います。

佐藤氏　終生飼育が法律で決められているのは、動物愛護法ですか。

小菅氏　そうです、動愛法。

朝倉氏　そうですね、動物愛護及び管理に関する法律。

事務局（加藤園長）　そもそも死生観というか、生き死にの感覚が欧米と日本では違うので、まったくそのへんは、相容れない部分はたぶんあると思います。だから、一方では、繁殖制限をするほうが動物の福祉にとってよくない。それで、生まれたもののいらないであろう個体は殺してしまったほうがいい、殺してしまえばいいじゃないか、というのは向こうの考えです。日本では、殺してしまうようなものを生ませちゃいけないとか、必ずしも全部欧米ナイズされたものをわれわれは受け止める必要はないと思います。

さっきもありましたけど、日本標準であり、円山標準を考えればいいと思います。

佐藤氏　ただ、考えておかなければならないというところはありますね。

事務局（加藤園長）　考慮に入れなければいけないでしょうね、いろいろ世界からいわれる。でも、われわれの考え方はこうですということをしっかり伝える必要がある。

小菅氏　動物の最期のところで一番問題になるのは、ある動物園であったゾウの延命の活動がありますよね。それを日本人は、よくあそこまでやってくれたっていうふうに動物福祉上、これが正しいと評価するのですが、海外の倫理だったら、あれは動物虐待だっていう意見がある。そのことはやっぱりしっかりと議

論しておいて、今、園長いったように、われわれはこういうことに関してはこうやるんだ、こう考えてるんだっていうことを、事前にきちっと明示しておく必要がある。だけど、こういう状態になったら、安楽死もやむを得ないという基準みたいなものも、きちんと考えておく必要があるのではないかと思う。そのへんの議論は職員プロジェクトではどうなっていますか。

朝倉氏　実際プロジェクトのなかではまだ議論されていない状況です。ただ、おっしゃる通り、そのような基準はぎりぎりになって決められることではないですね。たとえば海外だと、そういうのが外部の倫理委員会など、外部委員会に絡んでいただいて、ちゃんと外部から評価していただいたりする仕組みができ上がっていたりするのですが、円山動物園で外部の倫理委員会まで作り上げて、協力いただいて決められるかというと、なかなか難しい部分もあるかと思います。すべての想定はできないと思うのですが、こういった場合はというのは決めとかなきゃいけないと考えています。

吉中氏　今後の職員プロジェクトの進め方、だいたいのスケジュール感について教えていただけますか。

朝倉氏　まずは、今日のこの報告を聞いていただいて、これは違うなというような話にならなければ、まずは、このまま話を進めます。基本的な形はこの考え方で、それから項目ごとにぶら下がるものであったりとか、中項目となるものを作り上げていきます。

高橋氏　加えて、3月ぐらいまでには、たとえば、経営の側面とか、前回入っていた入園者数の側面をどう盛り込むとか、あと、コレクションプランとかそういったものを組み立てていってほしいと思っています。

金子氏　敢えて、これは違うのではないかという話をさせていただきたいと思います。職員プロジェクトの説明では「教育」が主たる目的となっていないのですが、やはり教育は、育てるとか、啓発する、普及するということに関係するところなので、小中学生、市民、観光客など対象もいろいろありますが、どう育てるのかというところの考え方が、動物園の本来業務として、もっとも大切なことだと思います。しかし、教育というのは動物園の弱いところで、教育は人を見て仕事をしなくてはいけないのですが、これに対応するセクションが動物園にあるのか疑問です。ですから、こういう構想を作るときには、もう少し広い

ビジョンをもって作る必要があるのではないかと思います。つまり、構想に人を育てるということを位置づけるのであれば、大目標のなかに教育をあげ、それなりのセクションを考えておく必要があるということです。それからもう1つ発信ですが、トップダウンで、なおかつ、動物園から発信していくというのあるのですが、こういう形だけではなく、外と連携して作っていく、外部と手をつなぎ外からの情報を入れてくるとか、そういう逆の矢印が必要なのです。市民動物園会議のなかでも話が出たのですが、円山の特長というのは、たとえば原始林がすぐそばにあるとか、あるいは、地域と連携するとか、動物園の外とのつながりをもてるということが、他の動物園とは違うのではないかという話が出ています。園長がいわれるように、円山らしさっていうのをどこに考えるかというと、そういう連携のところじゃないかなと私は思います。だから、そういうつながりを大切にする。それは、地域のつながりもそうですし、たとえば、団体で円山動物園を使っていろんな活動をされている外の方々もいらっしゃいます。酪農大学にもそういうサークルがありますし、NGO もここでいろいろ活動したりとかしています。そういう地域の人たちと、あるいは地域の団体と、どうやって関係を持っていかということが、基本構想の大きな柱の一つになるのではないかと思います。あと、もう 1 つが国際化で、円山動物園は少なくともアジアの中心になるぐらいのビジョンをもって、アジアのネットワークの核になるんだぐらいに考えていきたい。それは地球を保全するとかそういうレベルの話ではなくて、各地の動物園をつなぎ、連携するという仕組みをどう作っていくか、そういうことを考えていかないといけないのではないかと思います。繰り返しになりますが、教育に関してのビジョン、それから、地域との連携とか、あるいは、外の団体とか、外の組織との連携、国際的な連携、そういうような視点が必要ではないかなと思っています。

吉中氏　このあとの意見交換のところでそういう議論がまた出てくると思いますが、大変貴重なご意見をありがとうございました。

職員プロジェクトでは、今日の皆さんからの意見も参考にしていただいて議論を進めて、よりよいものにしていただければと思います。

－一時休憩―

○意見交換

吉中氏　後半も前回に引き続き意見交換ということですが、今、朝倉さんからご説明いただいた職員プロジェクトの進捗状況や作成いただいた資料も頭に置きつつ、こうあるべきじゃないか、こういう視点を入れたほうがいいんじゃないか、そもそもこういうところはどうなのか、そんなことを中心に意見交換させていただければいいのかなと思っています。特にこの図でいうと、一番上のところに動物園の目的として、○○を守るという形で書かれてありますけど、お手元の資料 4 には、各国の動物園の使命が短くまとめられています。わたしの勝手なイメージとしては、ここの一番上の動物園の目的（仮）と書いてあるところが、動物園の使命、ミッションとなるのではないかと思います。先ほど朝倉さんからも、外の人にわかりやすく伝える何かを作りたいんだというようなお話があったかと思いますけど、イメージとしてはこのようなものを、円山ならではということで作っていくっていくことなんだと思います。これについてのご意見とか、あるいはその下の保全がいったい何を目指すのか、そういうことをご議論いただきたい。また、教育というのも、先ほど金子さんからも意見がありましたが、どんな教育なのかとかそのようなことも含めて意見を出し合えればいいのかなと思っております。では、あとの進行は長谷川さんにお願いします。

ENV　よろしくお願いします。今、吉中さんにお話いただいた通り、いろいろご意見があるかと思います。本田さんの世界の動物園の話などお聞きになられて、日本との違いもあり、ちょっとびっくりされた点もあるかと思います。違和感というか、もともと持たれていたイメージと違って驚いたところ等、よかったらご感想をお聞かせいただければと思うのですが、福津さんいかがですか。

福津氏　今日のお話でいうと福祉の位置づけですが、すごく新鮮に話が聞けました。自然にどれだけ近づけるかとか、どれだけ快適にするかみたいなところをイメージしていた福祉と、またちょっと違うところまで広く範囲が及んでいるんだということがよくわかりました。先ほどの、たとえばゾウの話でも、わたしは知らない話ばかりで、世界ではこうですと聞けばああそうかと思うし、日本ではこうですと聞けばああそうかと。どちらもそういうものかと受け入れてしまう。ただ、結果的に何かいたずらに不安をあおられるようでは嫌だなと

思います。たくさん情報を持っている人でなければ様々な判断は難しい。基本構想のなかにどこまで盛り込むかというのは難しいですが、理念的なものだけが並ぶのではなく、サブブックでもいいのですが、円山動物園ではこういう福祉の考え方において、このように変えていきましたとか、こういう方向を目指してやっていますが今はこの段階ですとか、具体的に状況の説明があるといいと思う。できれば現場を見ればこの文言を見なくても安心して受け止められるようなものにしてほしいです。構想に福祉を高く義務づけていきますという文言が入るだけでは、言ってるだけでどうなの？と逆に受け止められかねない。理念だけが並ぶと、逆に不安に感じる人もいるんじゃないかと思うんです。円山動物園として今、このように取り組んでいますが、皆さんはどう思いますか、という投げかけも教育にいいと思います。これから動物園で働きたいという学生も多いですし。あなたはどうですか、どうやって変えていくといいですかという投げかけも必要ではないかと思いました。

ENV　基本構想では、文言は限られてしまう、ということですね。

福津氏　そうですね。解説を聞けばなるほどと思うのですが。具体的にイメージできるような何かが必要だと思う。今、ここの段階まで来ています、本当はこういうふうにしていきたい、そのためにはどうするといいと思いますか、などと違う業界の人たちもにアイデアを出してもらいやすく、門を開いているイメージがあればいいと思います。

ENV　位置づけとして、基本構想の枠組みの下に、具体的な基本計画みたいなものがあるかと思うのですが、それとも別に、なんらかのアウトリーチ活動といいますか、もっと声を取り入れたり、少し詳しく紹介したりするといった取組みも、基本構想に付随してやるのがいいということですね。

福津氏　そのように構想を作っていきたいということが伝わればいい。

事務局（加藤園長）　まったくの理念を並べるつもりはなくて、具体的にどうしていきたいかということは書いていくということになります。そのなかで、どれだけわかりやすく伝わる言葉を使うかということになると思います。単純に動物の福祉を守るということだけではなくて、なんのためにどういったことをやっていくかということを、文章に落とし込んでいかないと、次の計画のなかで具体化するための内容ができていかないこと思います。

吉中氏　名前はまだ決まっていませんが、基本構想というと、その下にそれを具体化した基本計画があり、その次に実施計画があるという、階層構造が浮かぶのですけど、われわれがここで議論しているのは、その基本構想のなかでも特にその理念みたいな、基本理念とか、あるいは円山動物園の哲学みたいことですね。そういうのがまずコアにあって、それを実際の事業に結びつけていくところで、具体的にはこんなアプローチがあるんじゃないですか、こんな実例があるのでこれをこう発展させていけばいいんじゃないですか、というのがなんか漠然とあって、その下に実行計画っていうような行動計画、実施計画、事業計画のような物がついてくるのではないでしょうか。

事務局（加藤園長）　経営理念のようなものがあって、もう 1 つ下のところまで、この構想検討では話していくのだと思います。計画では、具体的に何を飼育展示し続けるためにどういう施設改修をするかという話になってくると思います。だから 3 段階あるとすれば 2 段目までを検討でするのですが、どうしても基本構想というと箱物を作るためのベース的な捉えになってしまいますね。そうではなく、動物園経営指針というのか、経営理念とか、そんなものを作成するといった方がいいのかもしれない。

ENV　わたしたちはこういう方針でやっていきますよという理念があって、行動規範になっていくと思うので、その部分について的を絞って議論していくということですね。確か加藤園長は、基本構想は大きなボリュームではなく、短くてもよいとおっしゃっていましたが。

事務局（加藤園長）　そこにこだわっているのではないですが、立派な冊子のようにたくさん書くものではない 10 枚、20 枚くらいのボリューム感なのかなと思っています。ただ、もっといろいろ書き込む必要があれば、ボリュームは膨らんでもいいと思います。

福井氏　獣医師会のなかで野生動物対策のあり方みたいなものを委員会を立てて議論していまして、もう 7 年間ぐらい議論して、厚い冊子のものができ上がりました。専門家はそれを読めばいいですが、一般人は読みませんよね。それで、一般にぱっと見たときに触れて、ぱっと入ってくるものを、カラーの写真とかフローチャートとか、イラストとか使って、ほんと 1 枚ものみたいなものを作りました。それを各関係機関に渡してウェブサイトで誰でもダウンロード

できた。しかもそういうものをちゃんと汎用している。だからそういうものが、たぶん福津さんがおっしゃられたことだと思います。具体的な活動写真とかをこの福祉とか保全とかにつけていって、小学生が見てもわかって、ああ円山動物園こういう方向に向かっていくのだな、みたいなものがあったら親切かなと思います。

福津氏　細かく読まなくても、一目見てわかるようだといいですね。

吉中氏　基本構想を補足するようなちょっとした解説があればいいですね。今日本田さんに紹介していただいたような写真などがあると、基本構想が目指してるものが理解しやすい。

福津氏　ストレートに伝わるようなものがいいですね。

ENV　福津さんがおっしゃられている「不安をあおらない」という点ですが、今までの議論で、少し不安を感じた部分はありましたか。

福津氏　さっきのゾウの話もそうです。ゾウが死んだ時、ここ日本では、倫理的、宗教的に欧米とは違う事を知りました。では、円山動物園のやりかたは残酷ではないのか。倫理的にどうなのか。福祉的にどうなのか。正解がわからないので不安になってしまう。そだから円山動物園としては、こういう理由でこうしていますと、しっかり情報発信をして欲しいです。

事務局（加藤園長）　しっかり情報を伝えていくっていうことがまず１つ大事ですね。このあいだ、日本最高齢のサーバルキャットが残念ながら死んでしまいましたが、その子については、もう最後の最後まで皆さんに見ていただきましょうということにしたんです。だからもう動けなくなって点滴をしてる姿も見ていただきました。そこには動物園っていうのは命を伝えるところなので、しっかりお子さんとこう話し合ってください、ということも書きながらでした。今までは最後の最後には奥に引っ込めちゃうみたいなところもあったんだけど、そういうのはもうこれからやめましょう、というふうにいっているのです。だから正しい情報を正しくちゃんと伝えていくようにすることによって、そういう不安が解消されるのかなと思います。

福津氏　たとえば、今のように病気になって治療しているところを見せますといったとき、自然のなかにいたら死んでしまったものを、そうやって長く生きながらえるのは残酷じゃないか、そういう意見などはなかったんですか。

事務局（加藤園長）　そこは、わかりません。外国の方が見たときには違う感想を持つ人もいるかもしれないですが、われわれの知りうる範疇ではそういう意見は出なかったと思います。

小菅氏　今の話に関して、治療、治療というのは、回復することを目的に治療を行うのですね。

福津氏　延命とは違う。

小菅氏　はい。だからそこのところで、人も最近そういう議論をされてますよね。要するに管だらけになってまで生きていきたくないとか。そういうこともやはり動物園の動物にも反映されると思うんです。社会のそういう動勢というのは、必ず動物園の動物にも反映されるので。今は園長がいった通り、常に情報開示をして、われわれはこういう考えでこういうことをやっています。今、治療しているのは、こういう考えで治療します、というのが伝わっていれば、外部からは何もないですね。

逆に、ご苦労さまでした、というのがあったので、そういうことがきちんとやれれば、動物園はそれでいいんのではないかと思います。

ただし、これは変わっていきます。現時点でこれだからって、それをずっと 10 年 20 年続けていたら良いっていうことではないと思います。だから、逆にいろんな意見を出して不安にするよりは、円山動物園はこう考えてます、ということを、きちんと科学的に明確にすることが必要じゃないかと思いました。

ENV　水落さんはいかがですか。今日、出てきた話をお聞きになられて、どのようなご感想をお持ちですか？

水落氏　職員の方々で考えられた資料 1 の最初の図ですが、その一番最初に、動物園の目的があります。これは円山動物園の目的っていうことだと思うのですが、言葉をかえれば使命ですが、さっきお帰りになられた金子さんもいってましたけども、この守る、これはもちろんすごく大切なことだと思うんですけども、これだけではないんじゃないのかなと思います。円山動物園の使命ですから、これはすごく大切なことだと思うのですが、これが守るだけだと何かいい足りないことがたくさんあるのではないか。ただ長々となっても、もちろんだめかもしれないが、ここがしっかりしてないと、この下がばらばらになってしまって困ります。ここのところはしっかり、みんなで話し合って、その結果、

いろいろなところに波及していくという、そこを重要視したほうがいいと思いました。

佐藤氏　おっしゃる通りだと思いました。平成 19 年の基本構想では、その真ん中のコアのところが人と動物と環境の絆を作る動物園、というキーワードがあって、それに段階を追って枝分かれしていく状態になっていました。だからこのキーワードみたいのが、このなかで 1 つできればいいなっていう感じですよね。

ENV　例えば「守る」というワードがあがっているかと思いますが、他にどういうキーワードを活かせばよいでしょうか。さっき金子さんがおっしゃられていた、「育てる」あたりですか。

佐藤氏　つながるです。

ENV　「つながる」も必要ですね。

佐藤氏　守る、育てる、つながる動物園というのがわからないですね。

ENV　あまり長くもできないし、難しいところだと思いますが。

佐藤氏　ちょっとキャッチーな感じでしょうか。そこの下の中項目あたりで、今ずっと検討されて出されたようなことがしっかりフォローされていたら、伝わりやすさっていうところも出てくるんじゃないかなっていう気がしていました。

ENV　育てる、という部分について、高野さん、いかがですか。まさに高野さんが日頃取り組まれていることですし、動物園との連携という意味でも考えなくてはいけないことです。今日の話し合いをお聞きになられていかがですか。

高野氏　まず 1 つは教育のところ、図のなかで教育というのがあります。これ、金子さんが「誰がやるんだ」みたいなことをおっしゃっていましたが、環境教育をうたっている動物園とか、使命に書かれているところも結構あるのですが、実際のところは教育の要素を入れているところはどういう人を置いて、何かそのセクションがあるのかみたいな話をしてたんですけど、どういうふうに動いてるのかというところが知りたいと思います。何かご存じの方とかいらっしゃいますか。

事務局（加藤園長）　動物園によっては教育専門の、たとえば係長なりを置いてやっているところもあります。実は円山も 2 年前まで教育普及担当係長のようなポジションはあったのですが、組織の改編のなかで、別のセクションに変えてしまいまし

た。だから、限られたマンパワーのなかでどこにどう人を置くかっていうことになると思います。

高野氏　教育を入れるのであれば、その限られたっていうのはあると思いますが、どこまで力を割いてどのへんまで広げ、その連携を取れるのかというところが重要になってくると思います。それで、やっぱり札幌にある動物園ですので、いろんな団体の方が利用されているので、うまく連携していくことがこれから重要になるのかなというふうに思います。先ほど職員プロジェクトでは教育についても連携についても、いろいろここに書いてないことも話し合っているとおっしゃっていたので、それも今後聞いてみたいなっていうのがありました。あと、ちょっと素直な感想なんですけど、マップに理念的なものが掲載できないか。この動物園はどういう動物園なんだろう？と思った際、調べれば見れるのではなくて、動物園のマップに簡単にそういうのが記載されてもいいのではないかと思う。それを子どもが見てもわかるような、円山動物園はこういうためにあるんだっていうような、わかりやすくかみ砕いて説明されれば、教育に携わっている者としては、もう一段階のステップが低くていいなと思ったところでした。

事務局（加藤園長）　この調査結果の資料の 51 ページに、教育普及担当がどのぐらいいるか書いてあります。新しいものができた暁には、やっぱり目で見てわかるように、たとえば円山動物園のロゴをちゃんと作って、そこにワンフレーズのキャッチーなものが載っていて、何をしてるのかがすぐにわかる。今、よく企業にありますよね。企業名の下に一緒に書いてあるような、そんなものとかをしっかり作って、すべてそれを使うというふうにしていけば、もっと広がると考えています。

ENV　このあたりの、伝え方について、いかがですか。円山動物園では、これだけいろいろな職員の方が考えられていますが、ただ社会的な役割や使命というと、一般に対してイメージが伝わりづらかったり、一般の人が持つ動物園のイメージと必ずしも一致しないところもあると思います。地味でも大事なところはあると思いますが、それらは一般に浸透するでしょうか？今日の話の内容は、すんなりと一般に浸透しそうなイメージですか？それとも難しそうですか？福津さん、どうでしょう。

福津氏　新聞やテレビなどで紹介されないとなかなか触れる機会がないというのが正直なところだなと思いますね。前回もちょっとこういう議論になったと思うのですが、たとえば中高生が学習教材にできるような情報を、円山動物園から発信できるといいですね。先日、開成高校に英語の授業を視察に行ったのですが、英語の授業なのに防災マップを作っていたんです。外国人にもわかるように英語で考えて防災マップを作るという英語の授業。応用して、動物園の研究を英語の授業として学んでもいいし、道徳の授業でも、倫理の授業で来てもらってもいい。動物園って教材がいっぱいです。そういうアピールをして、高校の方から情報を取りにくるような魅力作りを意識したいですね。動物園の人も気づかなかいような提案があるかも。情報を出し続けるだけではなく、向こうから取りに来てもらうような関係が理想です。

ENV　広く一般の人が持っている動物園のイメージや役割と、ここに挙がってきているようなものとは、ずれていると感じますか？一般の人にも、動物園とはこういうものだと理解されているでしょうか。高野さん、いかがですか。

高野氏　私が関わる子どもたちのご家庭だと、さっきもありましたけどレクリエーションの意味合い、娯楽のほうの意味合いのほうが強いと思います。

福津氏　メディアに出るのもそうですね。ママさんが子連れで、イベントをしましたとか。読み聞かせや人形劇など、動物園を会場にしたイベントは増えた印象。やっぱりレクリエーション的な情報が多いかもしれない。やっぱりレクリエーション的な情報が多いかもしれない。

高野氏　レクリエーション的なとこが強い。でも、そこを入り口にどこまで広げられるかということだと思うのです。そこが入り口でも、全然いいと思います。あとは入ってからですね。

事務局（加藤園長）　職員プロジェクトでも意見があったのですが、博物館に行きましょうというと、何かしらちょっと勉強をしに行く気持ちで行くわけです。でも、動物園というのは、それがない。一方、本田のさっきの話にもありましたが、外国の動物園だと、もしかすると動物が見えない場面があるかもしれないけども、博物館的な展示が充実をしているので、たとえ、その個体の実物が見られなくても、こっちを見て満足をして帰ろうというところがあるようなんです。だから、展示の仕方とか、中身をどうするかという、円山動物園が何を伝え

たいか、ということをしっかりわかるようなことをしてあげないといけないのかなと思ってはいました。

福津氏　さっきの動画でたいへん感動したのが、カーテンが開くとそこに動物がいたという、ああいう演出は、すばらしい、心に響く演出だなと思いましたね.

事務局（加藤園長）　今度のゾウのところはそうなる、なりたいですね。

福津氏　そうなるのですか。

事務局（加藤園長）　わかりませんが、スクリーンをぐっと開けると、ゾウのプールがあって、予定ではゾウが泳いでいるはずなんですね。

福津氏　ちょっと勉強をしたあと、目の前に広がるというのがいいですね。

事務局（加藤園長）　今、動物園がやらなければいけないことで、たとえば、円山でちょっと足りないんじゃないかみたいなことは、なんかありませんか。今の動物園は、きっと本当はこういうことが求められているはずだとか。

福井氏　前回もちょっと紹介をさせてもらいましたが、この議論のなかで、ちょっと聞いていて感じたことは、アメリカの AZA ですら、今、動物園・水族館に対しての好感度が下がっていることが課題だということをいっています。それはなぜかというと、説明責任を果たせていないから。保全への貢献度とか、動物の存在意義をアピールしきれていない。アメリカですら、AZA ですらです。日本はなおさらで、先ほど来の議論を聞いていると、たぶん自分たちの逆に反省というか、元動物園職員としての反省でもあるのですけど、それをアピールしきれていないため、市民が十分理解しきれていないというところがあると思います。旭山にいたので、旭山は積極的に発信はしていたと思いますけども、それでもというところがあるので、そこまで意識ができていない多くの動物園というのは、なおさら厳しいと思います。ですので、これまで円山動物園が議論をして、職員が熱い思いをもってやってきていることも、この検討会で先ほど紹介された内容に対するみなさんの反応としては、「へぇ～、そうだったんだ！」という感じでした。ですから、一般の人やさらに自然とか動物園に関心がない人は意識がそこまで及ばないので、やっぱり、基本構想を作ったあとに、どのようにして広報をしていくかだと思います。園内マップなどのこういうところにもっとわかりやすくなんかメッセージなどを入れていくとかですね。いつもセットで「なんとかの動物園、札幌市円山動物園」と入れていく

とか。なにかで職員が話すとき、園長が話すときには、それを絶対に入れていくとか。マスメディアとの連携のなかでは、必ずこれを使ってくださいとか。あとは高野さんとか、これからいろいろ円山と外部で連携をされていく方には、円山動物園はこういう動物園、こんな動物園なんだよとアピールしていただける、もっとも身近なサポーター、連携外部団体をいっぱい作っていくというのは大事なんじゃないかなと思います。そこから、もっと一般の人により浸透をさせていく。かなり広報の努力が必要だと思いますね。

ENV　吉中さんにお聞きします。たとえば、日本動物園水族館協会 JAZA では動物園の 4 つの役割の一つとして、種の保存という言葉を掲げています。今回の円山動物園の職員の方の議論では、種の保存という言葉ではなく、保全という言葉でいろいろ出てきています。このあたりはちょっとややこしい面もあると思うのですが、この議論を、吉中さんはどういうふうにお考えですか？種の保存という言葉は意味合いが狭く、円山動物園のほうが、もっと広く議論しているように感じますが、そのあたりはいかがですか？

吉中氏　そう思いますね。先ほど、種の保存法で、ようやく動物園という名前が法律に出てきたというお話もありましたけど、まだ狭すぎると思います。今の種の保存法で動物園が取り上げられたことは、それはもちろんワンステップなのですが、そこでは絶滅の恐れのある種を生息域外でどう絶滅させないように守っていくか、その部分がすごく重要視されているので、それも 1 つ重要な部分ではあるのだけれども、それだけではないという気はします。だから法律上の話でいうと、日本の動物園の法的位置づけについてはまだまだやることがいっぱいあると思います。

今回示されたこの図ですが、よくできていると思いますが、まず 1 つ。細かいところで、動物園の目的ですが、すべてについて「○○を守る」と書かれていますが、保存するという意味の守るなのか、保護するという意味の守るなのか、どのように守るのかというところにも関係してくるのかなという気はしますが、ただ、守るだけではなくて、それをうまく使っていくとか、あるいは損なわれているものは元に戻していくとか、いろんなことを目指す必要があるのだと思います。そういうときに種の保存というとどうしても狭くなるので、文言は少し気をつけて考えたほうがいいかなという気はします。その下の

上位項目のなかでは、保全という言葉が使われていますので。保全・conservation というと、保存の preservation とか保護の protection よりはすごく広くなりますし、少し賢明に利用していくというような観点も入ってくるかなという気はします。それから一番の使命、目的みたいなところですが、そこに生物多様性の保全と持続可能な利用みたいな、そういうことが含まれるような使命になるといいなという気がします。また、生物多様性条約のコンテクストでも、生物多様性という言葉の意味が難しすぎるとか、そんなのわけがわかんないという人が、まだまだいっぱいいます。保全、持続可能な利用ということもいったいなんなの？ということで、すごくわかりにくい概念なので、それをどううまく伝わるように工夫するというのが大事ですし、難しいところだというのをわたしも実感をしています。先ほど、動物園といえば、やっぱり一般の人はレクリエーションの場、楽しみの場、レジャーの場という意識が強いというのは、私はそれでいいと思います。それが現実ですし、そういう人がたくさんなので。来てくれた人が、楽しかったねって帰ってもらわないと、動物園は成り立たないと思います。ただし、そのときに動物園側が伝えたいことを、ちょっとでも持って帰ってもらうという工夫が必要なんだろうと思っています。だから、保全だ、教育だというのを大きく前面に打ち出しても、それは一般の人の思いと乖離しちゃうので、とにかく楽しいんですよということをアピールし、楽しんでもらいながら、でもそれが実はね、という仕組みがいるのかなということをなんとなく思います。今日の話も聞いていて思ったのは、以前は日本の国立公園で働いていまして、動物園は国立公園とすごく似た構図だなと思いました。皆さん、日本の国立公園はなんのためにあるの？といわれたときに、なかなかぱっと出てこないと思うんですよね。北海道でも、たとえば、洞爺湖とか定山渓とかも国立公園で、要するに観光の場でしょといいます。それで、とにかく楽しめる、きれいな場所を楽しむ場所といわれる。そういう人が大多数だと思うのですが、しかし、実際のところは、そこを守っていくというところがすごく大きな目的の 1 つです。けれども、それを前面に出しても、せっかく来てくれている観光客の人にネガティブなイメージを持たれてもしょうがない。そこをどううまく伝えていくかというのがあって、国立公園も苦労をしてきたんだと思います。そういう意味で、楽し

んでもらいながら、それでもなんか、本来目指す使命にプラスになることを少しでも持って帰ってもらう、そのようなことを目指す必要があるのかなという気はしています。この図は本当によくできていると思うのですが、そういうなんらかの意味での使命を目指す、達成するために一番大事なのは、言葉でいっちゃえば保全とか教育かなと思います。それを支えるベースが、やっぱり動物の福祉、あるいは全般にわたる調査・研究みたいなもので、そのベースにあって、その上に保全活動はどうあるべきか、教育活動はどうあるべきか、というものが乗っかってくるのかなという気がしています。それが具体的にどういう組織体制でやっていけばいいのか。どう外と連携をしていけばいいのか。どうやってお金集めをすればいいのか。そういったことは、またその下に考えていかないといけないことだと思います。そういう意味で、全体の使命があって、それを達成するためには、やっぱり保全と教育は大きな 2 つの柱で、でもそのためには動物がハッピーで、それを支える調査・研究がしっかりしている。さらにそれを実現するためにはこういう連携が必要なのです、こういう具体的な教育活動が必要なのです、こういう事例があります、そのようなものが入っていくのかな、という気がします。

ENV　レクリエーションとしての機能を重要視しながら、生物多様性とか、持続可能な利用とか、そういう部分についても、円山動物園は掲げていく。ある意味 JAZA が掲げているものよりも、広いイメージになります。円山動物園は、JAZA よりも、さらに広い枠組みで社会的な役割を果たしていこうという感じになりますが、それでよろしいですか。

吉中氏　まったく個人的な意見ですけど、そんなに JAZA に気をつかわないといけないのですか。

ENV　そうですね。おっしゃる通りです。

吉中氏　先ほど金子さんが国際的に円山はどう進めていくのか、ということがあって、各国の動物園の理念みたいなのが配られていますけど、そのなかでも、世界規模みたいなことを書いているとこもあるじゃないですか。では、円山動物園は何を目指すの？というときに、たとえば、先ほどから議論がある、日本型の福祉、日本型の動物園、日本の文化を反映した動物園みたいな、あるいは東洋の思想を体現するような動物園ですね。いろんな考え方があるのだと

思うのですが、そういうときに、誤解を気にせず申しあげると JAZA を変えていくような勢いで、円山が引っ張っていけばいいのではないかなという気はします。

ENV　福井さんはいかがですか。

福井氏　今のこの機会をチャンスと捉えるべきで、円山動物園は全国のさきがけであり、海外をもけん引してやっていくくらいのつもりで，チャンスだと思います。これだけ職員の方も、周りの環境にも熱心な人が集まっていますので、今、考えているなかで、大筋間違っていないと思うので、そのまま勢いよく進めていくことが重要だと思います。

ENV　金子さんの話のなかに、アジアのネットワークの核になるんだぐらいの、国際化をしていくというような話がありましたが、そのあたりは園長はいかがですか。

事務局（加藤園長）　目指すことはいいわけですよ。その前に、まずは北海道のなかの核として、やっぱり北海道の残り 3 園間きちっと連携するし、まず足元を固めなきゃいけないのかなと思います。その上で国内でどういう役割をして、さらに世界的にはどういう役割をするのかというときに、北米と結ばれてもしょうがないので、やっぱりアジアなのかなとは思います。

福津氏　アジアの観光客の方はたくさんいらっしゃるんですか。

事務局（加藤園長）　もともと外国の観光客自体は全体の 1 割いかないぐらいではあるのですが、来ていただいている人の大半は台湾が多いと思います。

ENV　円山動物園が目指していくイメージとして、園長はまず北海道の核としてとおっしゃいましたけども、ほかの方はいかがですか？まずは足元からもっと地域貢献をという見方もあるかもしれませんし、もう少し広く日本の中での役割もあるかもしれません。そのあたりについていかがですか？

福津氏　冬も開いているということに驚かれる人もいると思うんですよね。単純に冬は雪が降っているから、動物園は休んでいると思う人も結構いらっしゃるんじゃないかと思います。お正月は開いているんだよというと、驚かれたことがありました。

ENV　それはおもに本州（道外）の方に対してということですね。

福津氏　そうです、本州からです。甘酒がもらえるよというと、行く、行くみたいな

話で。そういう情報も意外に喜ばれていいかもしれません。

ENV　北海道は、本州とも全然違う気候であったり、地域性であったりするので、そういうところも売りにしてということですね。

福井氏　札幌市民の動物園ではありますが、やはりホッキョクグマだとか、ゾウを飼育するというふうに決定して、そこにその命がある以上、これは札幌市、北海道だけのスケールで考えるべきものごとじゃなくなっています。それは全世界・地球環境と、その種に責任も負うということを意味しますので、それをやはりちゃんと平易に、一般の方にもわかりやすく、伝えなきゃいけないと思います。それこそ前回の議論にあったように、ゾウをなんで飼うんだと。それをもっとわかりやすく説明する。たぶんあれだけの説明を受ければ、そこにいる人は、うん、うん、となんとなくつながっていく。それでもたぶん、そこまで動物に関心とか関係のない人はちょっと反芻をしないといけない。そこをもっとシンプルにつなげる円山動物園の方針みたいなものを、小学生にもわかってもらえるようなものを職員のあいだで揉んで、キャッチーなものを考なければいけない。そして、なんでゾウなんだ、なんで○○なんだろう。なんで札幌の税金を使って動物園を維持しているんだろうということについて、理解を進めないといけない。そして、保全、地球環境をどう守ってくのとか、楽しんでそれを学べる場として、また、動物がいて心地よい環境は動物園だよということを、うまく両輪にしていかないといけないなと思いました。そこに大きな課題があるような気がします。ほとんどの動物園がうまくいっていないのは、そこがうまくやれていなからではないかと思います。

水落氏　自分と動物園の関わりをちょっと今思い出していたら、僕は札幌出身じゃないんで、小さいころに円山動物園に来た記憶というのはないんですよね。それで大人になってからというか、結婚をして自分に子どもができてから来たのが、たぶん最初なのかなと思い出しました。だから 20 年以上前のことなんですね。子どもが幼稚園とか小学生のときには、一緒に来たりして、いろいろ見てわあわあとかいいながら見て。でも、子どもが大人になっちゃうと、なんかもう来ることがなくなっちゃって、だから、もう何年もここには来てなくて。だから、今の現状はわかんないですよね。委員になっていながら、申し訳ないんですけども。たぶんいろいろ当時とは変わっていると思います。

こういう私みたいな人というのは、結構たくさんいると思うんですよね。そういう人たちに、どうやって円山動物園はこういうとこなんだよとか、行ったらこうなんだよとか、そういうのを考えて、じゃあ、何をすればいいのか悩んでいます。今回の基本構想のなかにそれがどういうふうに入れられるのかなとか、そんなことを考えているんですけど、うまく説明する段階には今はないという非常に歯がゆい状況なんです。

ENV　公的な機関ですので、必ずしも来園者だけではなく、動物園に来ない方、来なくなった方に対しても、動物園の意義を伝えていくことが必要ですよね。

水落氏　今回の基本構想は、前回と違って数値目標なり、そういうのは入れないということですから、別にお金がどうのとか、来場者数がどうのこうのというのを抜きに考えても、さっきの 4 つの動物園の使命でしたか、JAZA のですね。そういうことを当然取り入れなきゃならないと思いますが、さっき、先生がおっしゃった、レクリエーションでいいんじゃないのかと、動物園に来る目的は。だから、来るきっかけはそれで来て、知らないうちに、その 4 つのものが学べるような仕組みがあったらいいのかなとか思います。そのためにはいろいろな仕かけというか、サインが必要です。だから、それを工夫しながらやっていけばいいのかなと思いました。

吉中氏　連携とか、広報という話に関わってくるたいへん重要な視点だと思います。実際にどういう人に伝えていくか、どういう人とつながっていくかということ。英語でいうとアウトリーチみたいなイメージになるのかもしれないですけど、そういうことについて、この基本構想のなかに入るのか、その下になるのかは別として、しっかり考えていく必要はあるのだろうと思います。だから、今、あんまり興味のない人にはどう伝えるべきかを考えないといけない。レクリエーションで子どもたちを遊ばせに来ている人たちに対しては、どういう教育が効果があるのかとか。そういうのは、きっとどっかの時点で、みんなで考えていく必要があると思います。

ENV　福井さん、来園される方、および来園されない方に対しての、取り組みについて何かありますか？

福井氏　前回もお話をしたと思いますけど、旭山動物園にいたときの話で恐縮ですけども、とにかく園として、動物園と環境をつなげるんだという方針が、職員

のなかで徹底されていたので、飼育技術者は 1 日 1 回は必ず来園者に向けて動物の話をしようとなっていました。そのときに、彼らの生息する環境を意識させる話を必ず入れようというのを徹底した。そういうことは、動物園に来た人にも伝わるし、たぶんそういうとこを目指す動物園ですよというのは、市民にも伝わっていたと思います。そのためには、たぶん前回もいいましたけど、加藤園長をはじめ、現場にいるみんながそこをちゃんと理解して、常にそれを意識して、動物の飼育に当たっても、入園者と話すときにも必ずそういう気持ちが出ていくことが必要です。広報、マスメディアに話すときも、楽しいことと、1 つこれも入れてね、という条件を入れていくということをこつこつこつこつ積み上げていくしかないかなと思いますね。

ENV　マスメディアなり、どこかそういうつながりがあるときには、少しずつでも広報し、メッセージをプラスして入れ込んでいくということ。

福井氏　そうですね。まず身近なとこでいうと、幼稚園の遠足、小学校の修学旅行とかが来たときには、こういうことをちゃんと学んでいきましょうと。必ず飼育技術者のガイドの時間なりがあると思うので、そういうときには、必ず伝えていく。たぶん福津さんとか、高野さんとか、いろんな団体と何か一緒にコラボレーションをするときに、必ず、動物園の方針を参加団体の人たちには伝えていく。このように、ずっと浸透させていく努力をずっと続けていく。もう果てしない継続性を要する作業だと思います。

佐藤氏　レクリエーションを入口にして、教育につなげていくということでは、おっしゃられていたやっぱりサインというのが重要なんだなということと、あとさっきおっしゃった、博物館的な施設が必要と思います。円山にもあるといえば動物科学館がありますが、ただ、動物科学館の展示室はけっこう寂しいです。

骨の展示とか、結構インパクトがあるんだけど、あんまりお話が書いていないから、ただ、大きい骨だなというぐらいで終わってしまう。じゃあ、あらゆる場面で、大人が読んでも、感心して思わず帰ったら誰かにいっちゃおうみたいなサインとかがない。低いところには子どもの目線でやさしく伝えるものがあったり、そういう努力について、構想の中でどこにいれるかというのはあるのですが、そういう努力は大切だと思います。ただ、あとは既存の施設を

もっと魅力的に利用するということも必要かなと思います。なんとかして、大人に動物園に行くのはかっこいいっていうことをはやせられるといいですね。

ENV　大人向けのものをっていうことですね。

佐藤氏　そのためには、大人が来て、ほうって思うような魅力的な展示とかサインとかっていうのは、これから大事になってくるのかなっていうことを今、お話し聞きながら思ってました。

ENV　福津さん、動物園の大人向けの部分についてはいかがですか？

福津氏　そうですね、わたしも子どものころにはよく来ましたが、大人になったらだんだん来なくなりました。では結婚適齢期のカップル向けに縁結び絵馬など製作して、動物園で買ったものを神宮で奉納するのはどうでしょう。期間限定の円山動物園でしか買えない特別なものを販売するなどいろいろ考えたいですね。市民が支えるとか、市民と一緒に保全するといった言葉でアイディアを広く募集して、それをどんどん実現してく。そして、いろんな世代の人に来てもらう。結果それが保全につながるとか、教育につながるとか、そういうイメージは円山動物園らしくていいなと思います。わたし、旭山動物園へ初めて行ったときに、飼育員さんが役者だねって友人と一緒に驚いたのを覚えているんですよね。飼育員の方たちに直接、動物たちの生態や物語を楽しく教えてもらって面白かったなと。円山動物園でもすでにいっぱいやっているとは思うんですけど、飼育員の皆さんみんなでとなると大変。だから高野さんのように外からのサポーターももっと増やして、たとえば 5 人以上集まったらこういうガイドもできますという企画を作るとか、企業とコラボしてお土産をつけたり、時にはちょっと高級な有料イベントを開催したり。円山動物園は、市民から募集したアイディアをどんどん実現したい動物園ですとアピールしてみる。そしていろんな世代に来てもらえるような企画を、市民みんなでよってたかって考えるみたいな。そういうのもいいんじゃないかなと思いました。

ENV　高野さん、いかがですか？外部から動物園を利用することを考えたときに、より使いやすくなるために、サインとか、展示の仕方、解説とかも含めて、もっとこういうふうにしてもらえれば、こういうふうに使わせてもらえればみたいなことはありますか。

高野氏　サインが充実してるっていうのはいいなと思います。動物が見られないとかありますよね。昨日も幼稚園の引率で来てたんですよね。それで、帰る時間が決まってたりとか、ランチまでに帰らなきゃいけないとかいって、行ったけど動物が見られないっていうこともやっぱりあるんですね。でも、何か触れられて何か感じられる、五感に訴えるようなものがちょっと少ないから、幼児だとわかりづらいかな、と思います。読み物だけでは伝わりづらいっていうのがちょっとあって、そこは僕がうまく説明したりとか、解説したりとかして動いてくんですけど。そういう五感に訴えるものが、動物がいないときにあるといいなと思ったりしていました。あとは、イベント的なものも広報戦略の手段としてはすごくいいなと思うんですが、動物園の方が大変だなと思いました。私たちもイベントをがんがん打つと大変なんですよね。それは今後、この基本構想ができて、どういうふうにしていくかっていうところかな？と思いました。あとは教育の面で、僕は森林環境教育のインストラクター、ノルウェーのやつを取っていて。そこは林業がかっこいいものだって見せるために、森のなかで五教科をやれるようなカリキュラムを作りましょうっていうのがあります。たとえば数学であるとか、国語とか、音楽で歌を作りましょうとか、そういうのも広く捉えてやりましょうと。だから、動物園に来て、僕がやっているのは動物のこともそうなんですけども、動物を題材にして、俳句作りにきたりとか。そういったことのカリキュラムも学校教育のなかに入れていくと、動物園に来たから動物っていうよりも、さっきの、英語っていうのもありましたよね。そういう観点からも、ちょっと細かい話になっちゃうんですけど、今後こういうのを考える教育っていうふうに考えたときには、広く捉えていくと、もうちょっと来るのかなと思いました。中高とかっていうふうに考えたら、来るのかなとはちょっと思いました。

吉中氏　まったく同意させていただきたいと思うんですけども、最初のほうで、キーパーの下にスイーパーがいるっていうお話があったんですけど、もしこれから、こういう構想ができて、理念ができて行動計画みたいなのができたときに、動物園のなかだけで全部やろうと思う必要はまったくないと思うんですね。高野さんみたいな方もいらっしゃれば、もしかしたらスイーパー的な人

はボランティアでお願いすることもできるのかもしれないなと思ったりしました。動物園が核になり、どうやって周りの人と一緒になり、周りの人の協力を得ていくか、ボランティアを受け入れていくか、そういうことを考えられると思いました。自分で全部していかないといけないと思うと、どうしても狭くなってしまうというか、大変だなと思ってしまうことがあるかもしれないんですけど、逆に周りにこれだけの人がいるんで、札幌っていう大都会を抱えているなかで、ボランティアをやりたいっていう人もいっぱいいると思います。そういう人とどうつながっていけばいいのかっていうのを考えるといいのかなって思ったりしました。ちょうど今日、うちの大学から 1 人、ボランティアの学生来てるんですけど、彼女は円山動物園で環境教育をやってるボランティアグループです。ちょっとそれ紹介してもらってもいいですか。

古澤氏　酪農学園大学の 2 年生、環境共生の古澤といいます。よろしくお願いします。エコアークという団体で、主に幼稚園児から小学生低学年の子に向けて学生が環境教育を行っています。円山動物園で、毎月 1 回から 2 回ほど活動させてもらっています。今聞いていて、教育とかも大切っていう話とか、動物園もかなり考えてるのだということがわかりました。ただ、わたしたちはいつも動物園に場所を貸してもらって、イベントというか教育をやらせてもらっているという感じで、何か動物園側と一緒になってやるっていうことは今までなかったんです。今聞いていて、もし何かを一緒にやることができるんであれば、動物園側からもそうだし、わたしたち側からも、何か発信することができるんじゃないかということを思いました。

吉中氏　ありがとうございます。そういうことをやりたい人はいっぱいいるんだと思います。

福津氏　そういう窓口があるといいですね。職員とは別の第三者で。一括でコーディネートしてくれるような窓口が必要ですね。

ENV　園長、受け入れについてはどうですか？私や高野さんもそうですが、野外で活動している団体から、動物園でこういうのやらせてもらえればいいのになあとかっていうアイディアって出てくるかと思います。研究などもあると思うんですけど、外部からの、動物園を使わせてほしい、動物園に一緒にやっ

てほしいといった申し出に対する受け入れの態勢はどうなっていますか。

事務局（加藤園長）　マンパワー的な話でいけば、すべてウェルカムなんだけども、じゃあ全部一緒にやりましょうねといったときには人が足りません。だから、じゃあこの部分はご自由にやっていただいて全然結構ですよ。ここはじゃあ一緒にやりましょうね、とかっていう切り分けが必要か。だから、動物園をどんどんいろいろ上手に活用してもらうのはまったくウェルカムですが、どこをどういうふうに役割分担してやっていくのかっていうことになるのでしょうか。

福津氏　やってもらう側もウェルカムなんだけど、なかなか全部受け入れられない。そこのところをお手伝いする人が不足していますね。

吉中氏　仕組みですね。同じようなこと、国立公園でもボランティア制度があります。国立公園の管理にボランティアの人にもっと協力してもらいましょうっていうのが 20 年くらい前から始まっていますが、当初はやはり環境省側の考えも、ボランティアの人に来てもらったら楽になるだろう、という安直な考えで、来てもらえばもうそれでやりたいことどんどんできるから、楽になるというようなこと考えてた人がいました。しかし、それは明らかな間違いで、むしろボランティアにもっと活躍してもらうために、活動をうまくコーディネートする人が必ず必要なんです。この構想をどう実施していくかっていうところで、じゃあ今の円山動物園のマンパワーをどういう分野に重点的に配置していくかを考えていく必要があると思います。ボランティアあるいは外との連携がとにかく重要なんだっていうことになれば、1 人専属の人を置くとかですね。あるいは、外部とうまくやるメカニズムを作って、コーディネート役をどっかに置いてもらうとかですね。それにより 1 人分の人件費を割くことになりますが、そのかわりに 100 のことができるということになれば、投資効果があるわけです。そういうことを、どこかで整理っていうか、議論していくことが必要なのかなという気がしてます。

事務局（加藤園長）　ボランティアさんって別に下請じゃないから、やっぱり対等の立場で上手にお互いの力を出し合ってやってかなくちゃいけないですよね。今、その調整はここにいる寺島って係長にやってもらってるけれども、全部受け入れると彼は死ぬと思うんです。

ENV　小菅さん、いかがですか。

小菅氏　まず、今ボランティアの話が出たんで、ボランティアのことなんですけど、今園長がいった通り、ボランティアっていうのはまったく対等な立場で活動しなきゃだめです。そういう意味では、吉中さんさっきおっしゃった、スイーパーの部分をボランティアにっていうことはありえません。なぜかというと、先ほども話した通り、掃除とか、そういうことをしながら得る情報ってものすごく多いんですよ。それをきちんと汲み取れるような飼育係にならなければ、先ほどいった、専門員には育っていかないのです。アメリカはここのところを人に任せてる。私が一番違和感を持ってたのはそこなんです。キーパーがスイーパーに対してこうやってやりなさいって、いうだけで。しかし直接目で見ないので、本当に細かい情報を取れてない。そういう意味ではキーパーとスイーパーは、実は一体のもので、これは日本型かもしれないけども、僕は動物園にとって非常に重要なもので、ここから出てくる情報は非常に大きいので、だからボランティアにここを任せるっていうのはやめたほうがいいです。でもおんなじこといいましたよね。ボランティアで楽するだろうと思ったら結局大変だったっていう話。つながっていくと思うんですよね。それが 1 つです。

それともう 1 つ。レクリエーションに対する考え方ですけども、これは、先ほど朝倉の説明で、動物園の 4 つの使命をいいわけに使ってましたっていう部分、ありましたよね。種の保存とか、教育とか、研究とか、そういうもの。まさにその通りなんですよね。これをやってるからいいだろうというようなことで。そこでレクリエーションについては、どちらかというとその本当の意味っていうのをきちんと伝えてこなかった部分が確かにあるんですよ。でも、それは吉中委員長がおっしゃったように、レクリエーションというベースがなかったら動物園は成立しません。動物園という機関、組織というのは、お客さんが来てくれて始めて成り立つところなんです。ですから、教育、研究、保全の 3 つをやっているから客が来なくてもいいんだという間違えた論理になってはいけません。どうしてかというと、動物園に来て楽しいと思える人っていうのは、動物とともにあることを喜ぶ人なんです。だから、地球を救うにしても、地球を保全する、野生動物を守るにしても、そういう人を育てて増やしていくことが重要です。そういう人になってもらうた

めには、足しげく動物園へ来て、動物とともにあるこの空間を楽しむ、これを喜びとする人をたくさん増やしていかない限り、多数決の議論からいったら、我々の目的は達成できないわけですよね。人間のためにこれで良いんだって、ばさっと切ってしまうような社会にならないためには、やはり動物といて心地よく感じる人々を増やしていく。動物園の最大の社会的使命はそこにあると思うのです。ベースに楽しい動物園であって、その目標を掲げてるのは、結局われわれの活動が地球を救うんだという、そこのところへきちんと理屈をもっていくことが重要だと思うんです。それと、先ほど福井さんがちょっといいかけましたが、やっぱり、サインとか掲示ボードで、さあ見てくれ、といっても、それは惹きつけるものはないです。動物園で一番惹きつけるのは動物です。生きてる動物。生きてる動物をお客さんにきちんと伝える。これが実は飼育員の仕事なんで、そこで動物を理解して、動物の生きていく環境を理解して、それを守って行く方向に惹きつけといて、そこへ進ませるというのが飼育係の仕事だと思うんです。そういう飼育係に、たとえば円山動物園の専門員は、それを担える人材としてこれから成長していくということです。これが非常に重要なことではないかと思います。レクレーションについては、娯楽という言葉は嫌なんですが、やっぱり人間性の再創造とい言葉が好きなんですけど、そういう部分がとても重要なんではないかと。

それと、福津委員がおっしゃったように、教育という言葉が、あんまり好きじゃないです。大上段過ぎます、教育って。内側にですよ、われわれの組織のなかに教育担当を持つ、教育的展示を目指す、これはいいです。教育も使命だからいいんです。だけど、市民に向けてはおっしゃった通りです。ともに考えましょうねって。ここでともに動物に対して、どうしたらいいか考えましょうね、ともに行動しましょうよね、それが重要なのです。育てていくっていうとどうしてもなんかね、上から引き上げる感じがするので、動物園はやっぱり楽しく学んで、そういう方向をみんなで考えて、そして多くの人がそちらの方向へ向かうようにする。これが私は動物園の教育だと思うんです。だから今福津さんおっしゃったこと、まさにその通りだと思って、聞いてました。それには、動物園だけじゃとっても人が足らないので、多

くの、外部の人が一緒に協力してくれるっていう体制を作っていって、目指すのはやっぱり地球を守るっていうことになるんじゃないかなっていうふうに思いました。

ENV　ありがとうございました。たくさん議論してきましたけども、そろそろ終わりです。まだほかに言い足りない点はありませんでしょうか？小菅さんがおっしゃられたような教育の考え方であったり、連携についての話など、いろいろ重要な部分が出てきました。円山動物園が目指していく方向性について、ほかに何かありましたら、最後にどうぞ。

福井氏　自分たちの想い、大切な動物のことを伝えれば、一般市民の人にそれを同じように共感して大事に感じてもらえるかっていうような、伝えるところのちょっとした手法というか、技術的な部分は別にちょっと考える必要があるのかなとは思いますね。今まで通り、飼育をして、展示をしてというところから一歩さらに上を目指すためには、サインの効果的な伝え方もしかり、ガイドのノウハウ、あるいは外部の人との連携のなかでとか、見せ方、伝え方。これをもう少し、しっかりとこの機に、現場で議論する必要があるかなと思いますね。

吉中氏　1 つだけ。今日はお金の話があんまり出てこなくて。さっき本田さんの説明だったですかね、いろんな基金とか、外部資金の導入とか、外の財団のお金を使って保全活動どうするとか、寄付をどう募るのかということについて、「連携」の一部としてか、「広報」の一部としてか、わかりませんが、どっかで考えていかないとなっていう気はします。それでさらに保全活動、あるいは学びの活動が広がっていくのであれば、どういう仕組みがあり得るかわかりませんが、考えなければいけないという気がしました。

佐藤氏　今のに関連して、寄付を集めるっていうのはかまわないんですか。

事務局（加藤園長）　今でもサポートクラブやってますから、その裾野を広げていくっていうことはあります。今、一般の方は 500 円ですけども、別な形でいただく方法を考えれば、それは可能です。

佐藤氏　クラウドファンディングみたいな形で資金集めをしていくことは、市の動物園としては別にまずいことではないですか。

事務局（加藤園長）　まずいことではない。

佐藤氏　できるっていうことですよね、やろうとすれば。

事務局（加藤園長）　お金の話が出たんでちょっとだけ。行政的な話をすれば、先ほど、世界の動物園と比べて、圧倒的に安いわけです。それが、受益者負担的に適切なのかっていうことは、持続可能性を考えていく上では、どっかで議論しなきゃならないことにはあるのかな、という気がします。

福津氏　わたしが子どものころは、ゾウさんのエサのリンゴがいっぱい売っていたと思うんですけど。来年またゾウ来るといいますし、またリンゴを売ったりとか、入場料や食事以外でお金を落とせる事って今はなかったような気がします。だめになったんですか。

事務局（加藤園長）　今はないですけど。エサやり自体については、これからもっと動物の栄養学的なことを考えてエサを構成していかなきゃなんないかな考えています。普段あげてるエサと、そういうおやつ的なものと、どうバランスを取るのかとかいうことが出てくるので、エサやりでエサを売るのはなかなか方法としてはやりがたいのかなと思います。あとは民間ですと、遊園地のように、さっきの外国の動物園ありましたけども、これをやるにはいくらください。というのはあるけど、自治体立としてはなかなかそれがやりがたい部分があって。実費としては簡単にいただくことはできるけども、料金としては、料金もらうときは必ず条例で定めなきゃいけないことになっているので。それをいかに上手にやるか。それを寄付にするか。だけど、寄付にするには、もらう目的をはっきりして、それをしっかり上手に使わなきゃいけないというのもあるから、ただお金を集めるのではだめです。やっぱりちゃんとした目的を持ってやっていくことが大事なのかなと思います。

ENV　それでは、そろそろ委員長にお返ししたいと思います。

吉中氏　ありがとうございました。朝倉さん、なんか参考になりそうな話はありましたでしょうか。

朝倉氏　もちろんです。

小菅氏　ひとこといったらいいじゃないですか。せっかくだから。

朝倉氏　今、内部で 9 回の会議を重ねてきて、実は、職員の皆さんには申し訳ないかもしれないですけども、この職員プロジェクト自体は内部の意識改革というか、内部の教育ということも踏まえながら、一緒に進んでいく仲間を作り

ながら進んでいます。そのためにも、結構な時間を費やしながら進んでいるのですが、9 回目でやっと心が 1 つにまとまりかけた。皆さんからいただいたご助言をもとにして、残り 3 か月くらいになるかと思いますが、形にしていきたいと思いますので、またご協力いただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

吉中氏　よろしくお願いいたします。最初のほうにいいましたけども、職員プロジェクトのディスカッションにわれわれも参加っていうか、横で聞かせてもらってもいいということでした。

プロジェクトの進捗状況をまたお教えいただければと思います。

事務局（神課長）　事務局から提案があります。当初検討部会は 4 回でしたが、十分な議論を尽くすため 5 回にしたいと思います。開催日は、予定ですが、3 回目が 2 月 7 日、4 回目が 2 月 26 日、5 回目を 3 月 12 日ということでお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

―一同了承―

吉中氏　では、次回 2 月 7 日、その次が 2 月 26 日（その後 23 日に変更）、第 5 回が 3 月 12 日ということになります。お忙しいと思いますけど、ぜひ時間を取っていただければと思います。

（了）